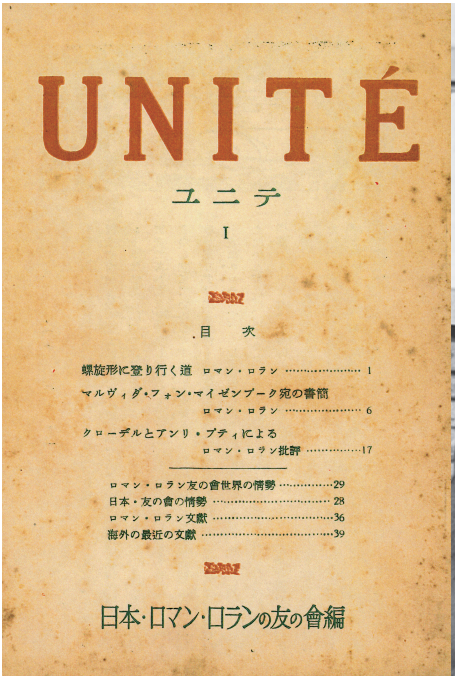
ユニテ

2023. 6

50



UNITÉ

ユニテ

I

目　次

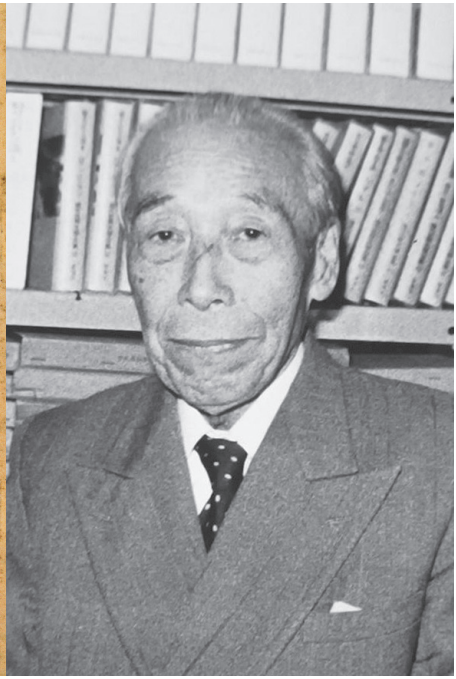
螺旋形に登り行く道　ロマン・ロラン …… 1

マルヴィダ・フォン・マイゼンブーク宛の書簡
ロマン・ロラン …… 6

クローデルとアンリ・プティによる
ロマン・ロラン批評 ……17

ロマン・ロラン友の會世界の情勢 ……29
日本・友の會の情勢 …… 28
ロマン・ロラン文獻 ……36
海外の最近の文獻 ……39

日本・ロマン・ロランの友の會編



一般財団法人
ロマン・ロラン研究所

表紙　日本・ロマン・ロランの友の会編による『ユニテ』第１号の表紙（1950年11月５日発行）（左）と宮本正清（研究所書庫で、1977年）（右）

目　次

生なるコモンズとロマン・ロラン
——文明・戦争・欧州・日韓 …… 濱田　陽 …… 1

ロマン・ロラン研究所設立五〇周年記念
「古都・京の記憶に残すべき戦時の日仏交流」——関西日仏学館
…… ジュール・イルマン、加賀美幸子、宮本エイ子
司会　和田義之 …… 41

二〇二二年度、読書会の報告 …… 清原章夫 …… 74

ロマン・ロラン研究所便り
新役員一覧 …… 75
短信 …… 76
寄贈図書 …… 78
研究所設立趣意書 …… 79
研究所の活動 …… 80
編集後記 …… 89

生なるコモンズとロマン・ロラン
――文明・戦争・欧州・日韓

濱田　陽

一　残響と予感

コモンズは共有地と訳され、占有物でないため、みなが入っていくことができる。王侯貴族、資本家、国家のものではない。イギリスでは誰もが自由に羊に草を食べさせることのできる牧草地をいったが、日本では里山などが相当する。

そうしたコモンズは、自然、生きもの、人、つくられたもの、人知を超えるものとの関わりのなかで、わたしたち自身の想像力から発し、歴史的、伝統的に守られてきた、ある共有領域を示している。今日では、地球環境やインターネットのようなヴァーチャル空間までがコモンズの観点から論じられるなど、その概念は拡張されてきた。

そこで、こころのなかの、この想像力から生まれ続ける、共有領域をさらに一般化し、リビング・コモンズ（living commons）、日本語で、生なるコモンズ、と呼び、人文学のテーマとすれば、これまでにない文化論、文明論が展開できるだろう。[1] 生なるコモンズは、多様な存在や領域の重なりに目を向け、そこに生動する共有可能性領域を浮かび上がらせる。

そして、この「生なるコモンズ」の視座からロマン・ロランをとらえれば、存在や領域の間に張り巡らされた様々なレベルの壁を越える、新たな世界が見えてくるのではないか。

ロランが見つめた生と死や、表現様式が異なる音楽と文学の関係性に、あらためて着目できる。ロランは、ナショナリティとエスニシティ（文化的なまとまり）についても、国家や民族の違いを対立的にとらえず、フランス人の作家でありながらドイツ人を主人公に大河小説『ジャン＝クリストフ』を書き、国境を越えて数多くの読者を獲得した。ジェンダーからは、男性でありながら女性を主人公にした大河小説『魅せられたる魂』を執筆し、自由を求めて自己形成していく魂を描いている点に注目できる。そして、非暴力と暴力、さらには、無宗教と宗教の関係においても、ロランは独特なとらえ方をしている。このような異なる領域や立場の重なり合いから、ロランという表現者はきわめて深いイマジネーションの力を発揮した。だからこそ、いずれの立場か、はっきりしないとして批判、誤解も生じてきたのだろう。

まず、グーグルが二〇一〇年から運営しているNgram Viewerを一瞥してみよう。現在は、英語、フランス語、ドイツ語、中国語、ヘブライ語、イタリア語、ロシア語、スペイン語で表現されている出版、文献中の単語の出現頻度が瞬時にわかる。二〇一〇年時点で五〇〇万冊、五〇〇億語を検索できており、今日ではデータがさらに増加している。[2] Romain Rollandの語の検索結果は表1の通りである。

一八六六年に生まれ、三七歳で『ベートーヴェンの生涯』（一九〇三年）を書き、さらにベートーヴェンをモデルに同時代を生きる小説を『ジャン＝クリストフ』（一九〇四－一九一二年）として三八歳から四六歳にかけて発表する中でロランの名は高まっていく。そして、第一次世界大戦時、精神の仕事に携わる哲学者、思想家、作家、芸術家は、こころの国に住んでおり、相手を憎み、殺し合うことから距離を取るべきだ、とロランは声を発したが、母国フランス、フランスと敵対したドイツのどちら側からも非難され、スイスに「移動」せざるをえなくなる。しかし、西洋の

表１　Romain Rolland の出現頻度の変遷
出典：Web サイト Google Books Ngram Viewer による表示

没落が痛切に意識されることになったこの文明の荒廃状況において、ロランの声は注目を集め、大戦中にノーベル文学賞（一九一六年）を受賞する。

ところが世界恐慌が起こり、ファシズムが台頭するにつれて、ロマン・ロランの名声も下火になっていく様が見て取れる。第二次世界大戦中、ロランには、以前のように精神の独立を明確に訴えていないという批判や期待の反動があり、ロラン自身、自由にメッセージを発せられなくなった複雑な事情があった。ロランの最晩年については多くの研究、分析があり、それらの知見にも立った上で、あらためて考察してみたい。

さて、ロランは一九四四年に逝去したが、第二次大戦終結後、戦時期をふりかえる中、関心が再び高まる。日本では、フランスに次いで、ある意味でフランス以上にロランへの関心が注がれていた。ロランを愛し、研究を進め、全集が何度も編まれた。Ngram Viewer は、ピークを一九六八年と示している。以降、ロランへの関心は世界的に下降線を辿る。筆者は生年が一九六八年であり、まさにこの下降線を生きてきた世代である。[3]

ところが、二〇一二年から関心は復活し、逆カーブを描く。それはデータが表示可能な最終年度の二〇一九年まで続いている。二〇二〇年がベートーヴェン生誕二五〇年であったことから、『ベートーヴェンの生

涯』の作者で、音楽学者としてもベートーヴェン研究の先駆者の一人といえるロランへの関心が高まったのだろうか。あるいは、ヨーロッパや自由の理念の問い直しのなかで、ロランの存在への見直しが行われているのか。その理由は判然としない。様々な複合的な要因が重なっているのだろう。

二　ロラン・ロラン、共有可能性の河

生と死

ロランは五歳のとき、三歳だった妹を亡くしている。そのことを回想する『内面の旅路』の文章に目を向けよう。[4]

私は五歳である。私には妹が一人いる、マドレーヌという名で、私より二つ歳下である。一八七一年のことである。六月の末。私と妹とは母と共にアルカシヨンの海岸の砂の上にいる。（中略）私は同輩の少年たちと遊んでいる。（中略）その仲間の中で私はいちばん強い子ではない。そして勝負から追い払われた私は、仏頂づらになりべそをかきながら本能的に小さな妹の足もとにもどって来た。――その小さな両足は、砂までとどかずぶらさがっていた――そして私は、砂をばたばた足ではね飛ばしながら、鼻先を妹のスカートに当ててしくしく泣いた。そのとき妹は小さい手で私の髪の毛を静かに撫でて言った。

「かわいそうな、ちっちゃなマンマン……」

私は急に泣きやめた。なぜかは解らず私は心を打たれた。眼をあげて妹を見上げた。そして私には妹の優しいそして憂鬱（メランコリック）な顔が目に映った。（中略）いくらか肥っているその顔、淡青いその眼、きんいろのみごとな長い毛、

私の母の誇りであった女の子――青と白との菱形模様のスカート、その上方には白いブラウス、垂れている小さな脚には、厚い白い靴下と、先端の丸っこい革製のサンダルを穿いていた……妹の言ったあの言葉に現れていた憐れみの口調。私の頭に置かれていた優しい手。悲しそうな眼ざし……それらのものが私の心の底まで徹った。妹よりももっと高いところから私に来ている何ものかの啓示を私は受け取った。

（中略）

私たちは汀から宿に帰った。太陽が海に沈む。これが、幼いマドレーヌの一生の最後の日である。その夜のうちに妹はディフテリアのような病気のために死んで行った。ホテルの、息苦しい一室の中での、最後の六時間の苦しみ。(1)

（1）妹は自分の死を感じた。彼女の眼が懇願した。彼女はもうほとんど声が出せず、全く小声で話した。しかし彼女は泣いている母に――「こわがらないでよ、ママン！」と言った――それから呼吸困難のために痙攣状態におちいった。死の一時間前に妹は《彼女のちっちゃなマンマン［ロラン］》を呼んでほしいとの意志を示した。その《ちっちゃなマンマン》は眠っていた。そのことが妹に告げられた。彼女は納得した。彼女は彼女の母のひざの上にからだを投げかけてそのまま死んだ――意識は全く明瞭だった。……

――「私の心臓（最愛の者）が死んだ」と母は書いた。

（中略）

海辺の砂の上に腰をかけている幼い女の子。そして、その手と声と眼ざしの接触――それらの手と声と眼ざしとは決して私から離れなかった。それらは、なんと私の存在のいちいちの気孔から染み込んだことか！　妹は四歳にとどいていなかったし、私は五つにもなっていなかったあの時に、私と妹との二つの心は、あの告別の中で、思わず知らず一つに溶けた。あのとき私たち二人は年齢を超えてしまっていた。そしてそれ以来、互いに離れる

ことなく互いに成長した。なぜなら、ほとんど毎晩、私は眠りに就く前に、私の考えの一つを、定かならぬ形のままに、あの妹に語りかける習慣を捨てない。そして私は彼女において《啓示》を認めている。（中略）――その啓示とは、彼女が地上を通り過ぎた時の至高の瞬間に、私を彼女に結びつけたところの、貞潔無垢な抱擁の神的な意義――すなわち人間的な《憐れみの心》である。[5]

（「『内面の旅路――生涯を回想する精神の夢』[6] I　落し穴」『ロマン・ロラン全集』17、片山敏彦訳、二九四－二九六頁　一九二四年、五八歳時の回想）

この時の経験がロランに深く影響し続けたことがベルナール・デュシャトレ『ロマン・ロラン伝』（原著二〇〇二年）でも指摘されている。自分は生きているが、亡くなった妹とともにいる。妹の死・生と自らの生が溶け合う、ある精神の領域がここに表現されている。

『ジャン＝クリストフ』を見よう。ドイツ人の少年が音楽家としてベートーヴェンのように成長し、数々の傑作を生み、ロラン自身の時代に精神の自由な表現を求め、葛藤しつつ生きる。一九〇四年から一九一二年にかけて主人公クリストフ・クラフトの誕生から生涯を叙述し続けたロランは、その最期をどのように描いているのか。

クリストフの名は、聖クリストフォロスという西洋の伝説に拠る。幼子イエス・キリストを背負って、流れる河を、こちら側からあちら側まで、杖をつきながら渡った。幼子であるが、背中に乗せれば非常に重い。イエスが全人類の苦しみを背負っているためだという。この西洋の伝説を用い、ロランは次のように翻案する。

聖クリストフは河を渡っていた。夜もすがら彼は水流にさからって歩いた。（中略）彼は左の肩に、かよわくて重い《子供》をかついでいる。聖クリストフは、地面から引っこ抜いてきて杖にしている一本の松によりかかる

とその杖がたわむ。（中略）

（「『ジャン＝クリストフ』十　新しい日　第四部」『ロマン・ロラン全集』4、片山敏彦訳、三七六頁）

このような光景がクリストフの意識のなかに映じている、と読んでよいだろう。[7] 一見、典型的な描写である。そして――

いまにも倒れそうなクリストフの手が、とうとう岸に触れる。そして彼は《子供》に言う――

「さあとうとう私たちは着いた！　なんとあなたは重かったことだろう！　あなたはいったい誰ですか？」

（同）

伝説では、それはまさに救い主イエス・キリストということになるが、ロランは、このように描き換えた。

そして《子供》は言った――

「私は、生まれ出ようとする日なのだ」

（同）

人生の終幕、主人公の意識が途切れる場面で、ロランは、新しい日が生まれるというイメージで小説を終えている。死をすべての終わりとする思考ではない。[8] 生と死の重なる領域で、ロランの想像力が働いている。

ここで、筆者が『生なるコモンズ』（二〇一二年）で描いた図を参照しよう。「ある何か」が、もともとそこにある

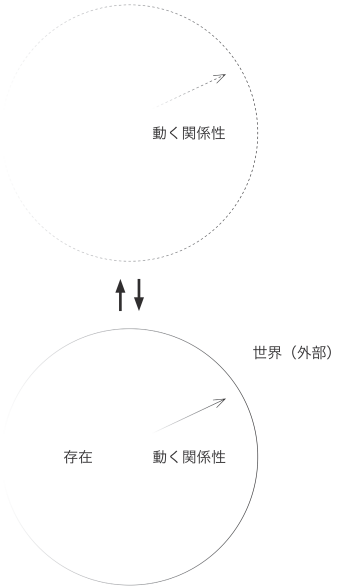


図１　動く関係性から立ち現れる存在と世界（外部）
出典：濱田陽『生なるコモンズ』 71 頁

のではなく、常に変化し、ゆれ動いている。ゆれ動きながら、関係している。これを「動く関係性」と名づけている。

自分と自分以外が最初からあるわけではなく、何かが動くことによってよくわからないものとの関係が生まれてきて、領域がおぼろげながら生じてくる。

そこから、はっきりと外の世界と自らを意識すれば、存在と世界がつかめるようになる。

様々な哲学がそれぞれの説明の仕方、言葉で表現してきている様相だ。図1の、上図、下図のいずれにも動けることが大切で、自他がはっきりしている状態からよくわからない状態へも戻りうる。こころのなかの事象は、動く関係性、である。

そして、反応があったときに外の存在を意識し、自分と他が分かれてくる（図2）。

このようにとらえれば、必ず重なっている領域があり、これが共有領域である（図3）。

これは様々な事象に適用できる。人間にはこころのなかから、自分と自分以外の何かの重なりをすべて否定していく傾向もある。しかし、この共有領域を無視して、自分と他を峻別すれば、意識的にも物理的にも固い壁をつくらざるをえない。

図3から図2へ戻っていき、最初の図1からまた行き来することが可能ととらえれば、ロマン・ロランを通じ、様々な重なりの領域から生じてくる、想像力の可能性に注目できるだろう。

表現様式――音楽と文学

音楽家になりたいと願ったほどに音楽を愛し、ピアノの技量もプロフェッショナルに近かったロランだが、長子として早く家族の期待に応えなければならないなどの事情から、音楽家の道を断念した。ロランの青年期の一九世紀後半には新たな作曲家、新たな音楽が生まれ、一七七〇年から一八二七年までロランの約百年前を生きたベートーヴェンは流行の先端と見られていない。しかし、ロランは同時代のフランス音楽よりベートーヴェンにひかれた。そこには「自由の精神」がうごめいていた。そこで、文学という表現様式を通じ、ベートーヴェンが探求、表現した世界を新たな時代に追求しようと発想したといえるだろう。[9]

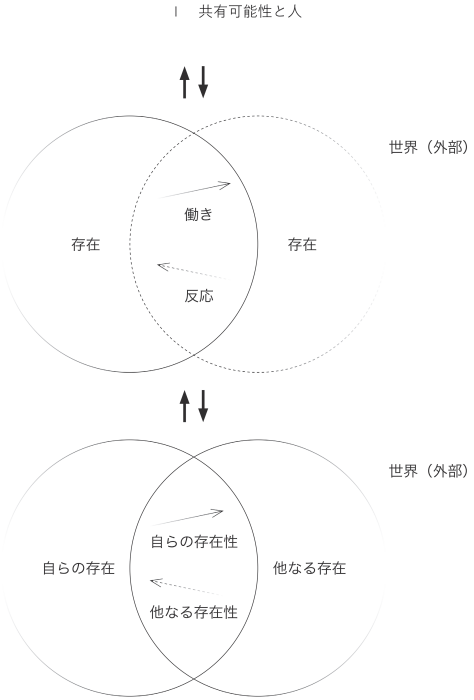


図２　自らの存在、他なる存在
出典：同、72 頁

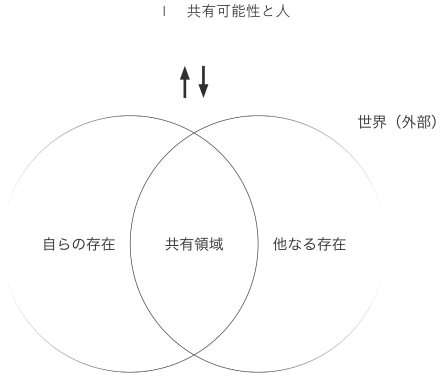


図３　共有領域
出典：同、74 頁

ある芸術やパフォーマンス、スポーツなどに憧れても、同じ芸術家、アスリートになれるとは限らない。だが、別の仕事、表現様式、人生によって、自らの世界を見つけ、探求することができることがある。

二〇二一年一〇月、ショパン国際コンクールで優勝した中国系カナダ人ブルース・リウは、同年一一月、ポーランドの国立フレデリック・ショパン・インスティテュート広報担当者とのインスタライブによる英語インタビューで好きな作家について聞かれた。カナダのフランス語圏で育った彼は、「ロマン・ロランがとても好きです」と答えている。一九九七年生まれのリウは二五歳である。

――好きな英語の著作家はいますか？　好きな英語の作家はいると思います。

「英語？　私はフランス語の本をもっと読みますから」

――じゃあ、フランスの著作家にしよう。

「フランス？　ロマン・ロランがとても好きです」

――ロマン・ロラン？

「ロマン・ロラン、ええ。そして、（他は）わかりません、たくさんありますから」

――とても音楽的な作家ですね。

「ええ、今日は少し忘れられがちですが、彼には本当にいい本があります」

――ええ、ポーランドではそうでなくて、まだとても知られていますが、もちろん翻訳でですが。

「彼のことを知らない人も多いですが、ご存知のように、彼は、彼は偉大です」

――おそらく、あなた方の世代によるのでしょうね。

インタビューアーの「とても音楽的な作家ですね」との応答に、「ええ」と強く同意している。ピアニストはピアノでパフォーマンスをするが、文学の言葉を通じても、深い何かにふれる。そこに、中心的作家としてロマン・ロランが生きている。音楽のインスピレーションを小説執筆に活かしたロランとは、ちょうど逆になっている。[10]

リウは五年前、二十歳のときにも、ロランの言葉をフェイスブックで引用していた（二〇一五年三月二〇日）。

幸福とは魂の薫りであり、歌う心の調和である。そして、魂の音楽のうちいちばん美しい音楽は慈愛心（ボンテ）である。[11]

（『ジャン＝クリストフ』八　女友だち」『ロマン・ロラン全集』3、片山敏彦訳、四五八頁）

『ジャン＝クリストフ』第八巻「女友だち」最後部にあたり、この箇所の直前は次のようになっている。

そしてクリストフは考えた――結婚している女性たち、結婚していない女性たちの幸福あるいは不幸をつくるのは、一定の宗教信仰があるか、ないか、でもなければ、子供を生んだか生まないか、でもない。

（同）

ここで「女性」を「男性」と置き換えて読むことも可能だろう。クリストフは成長していくなかで、様々な友だちができる。こころひかれ合うが別れを経験する感慨も表現されている。幸福は宗教信仰の有無、子供のあるなしではないといい、「慈愛心（ラ・ボンテ）」（la bonté）と表現されている言葉は、亡き妹マドレーヌの回想でロランが用いた「憐れみ（ピチェ）」、「人間的な《憐れみの心（コンパッション）》」とも響き合っている。それは、これらの記述の少し前で、亡き妹マドレーヌとの経験を、ドイツ人の小さな女の子の友だちの思い出に置き換えて、それとわからないかたちで表現していることからわかる。こ

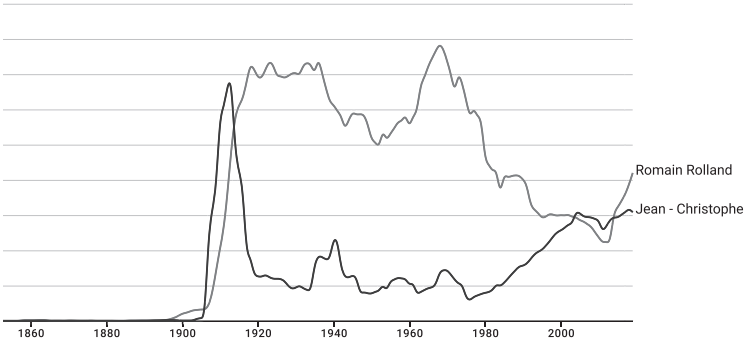


表２　Jean-Christophe を加えた出現頻度の変遷
出典：Web サイト Google Books Ngram Viewer による表示

の巻の最深層を亡き妹が担っているのだ。

『ジャン＝クリストフ』刊行後の推移を見るため検索ワードを加えれば、Ngram Viewer は表２の軌跡を示す。

あくまで単語での出現頻度であることを留意しなければならないが、一九七〇年代後半からの Jean-Christophe の上昇が興味深い。ロラン作品の影響からか、この名が人名等で多く用いられるようになったことも関係しているのだろうか。

本論はロランの想像力の特性についてアウトラインを見出すことを目指している。歩を進めよう。

ナショナリティとエスニシティ――欧州・日韓

『ジャン＝クリストフ』は、フランス人の作家がドイツ人を主人公として書いた話である。それほどロランがベートーヴェンを敬愛したためでもあるが、たとえば、日本の作家が韓国人を、韓国の作家が日本人を主人公にするようなものだ。[12] ロランの想像力に示唆されつつ、隣国、韓国に目を向けてみたい。

日韓併合期、一九二二年にロランの『民衆芸術論』が半島で紹介される。ロランは、劇は限られた富裕層だけのものではなく、民（たみ）のものであると論じていた。無政府主義者、大杉栄による日本語訳が、朝鮮語に翻訳される。朝

鮮の近代化を進めた大韓帝国（一八九七～一九一〇年）が失われ、半島の読者がロランに関心を寄せていたことがわかる。大杉は一九二三年の関東大震災の混乱に乗じて甘粕正彦大尉らによって虐殺されてしまうが、意外なかたちで、ロランの橋渡し役にもなっていた。ロランの『マハトマ・ガンジー』（一九二三年）も、朝鮮の青年たちに特に感動を与えたとされる。

近年の研究で、大韓民国臨時政府の在フランス特派員・ジャーナリスト、徐嶺海（ソヨンヘ）（Seu Ring-Hai　一九〇二年生。一九五六年失踪）に照明が当てられ、ロランとの関わりが注目されている。一九一九年の三・一独立運動後、上海を経て一九二〇年末にフランスに渡り、十一年の小中高等課程を六年で終え、一九二七年、ソルボンヌ大学哲学科に入学。人びとの意識を覚醒させる小説の力に着目し、自伝的小説 *Autour d'une vie Coréenne*（『とある韓国人の人生とその周辺』一九二九年）を発表した。三・一運動の「独立宣言書」が収録され、一年で五版を刷る作品となり、ロランに献呈もしている。韓国国立中央図書館の嶺海文庫に彼が愛読していたロラン作品が多数収蔵されている。文学雑誌 *L'Europe*（一九二三年、ロランとフランスの作家グループが創刊）やアンリ・バルビュス創刊の *MONDE* でも記者として活動し、ナチスへの抵抗運動レジスタンスにも参加した。統一祖国を求めたソ・ヨンヘは、初代韓国大統領になる李承晩（イスンマン）の路線とは相容れず、一九五六年以降、その足取りはつかめていない。[13]

フランス国立図書館蔵のロランの生前の蔵書に、「ムッシュー・ロマン・ロランへ」とソ・ヨンヘの献辞が付された第二版があることが確認できた（写真）。彼のようなロランとの関わり方は日本の知識人たちには見られず、興味深い交流だ。

韓国では植民地統治が終わり、朝鮮戦争（一九五〇－一九五三年）と重なる時期からロラン作品がたくさん翻訳されてきた。少年少女向けの翻案も多くつくられてきている。トルストイ、ミレー、ミケランジェロの生涯に関する作品も翻訳されている。北朝鮮での訳書もある。

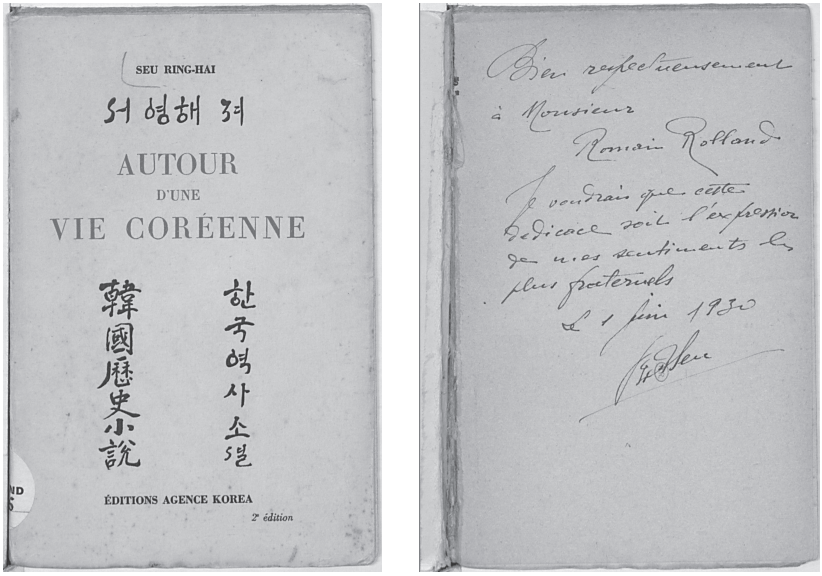


写真　ロマン・ロランが所持していたソ・ヨンヘ『とある韓国人の人生とその周辺』
ロランへのソ・ヨンヘの献辞が確認できる。
出典：gallica.bnf.fr / Bibliothèque nationale de France

一九五〇年にベートーヴェン、一九五四年にトルストイ、一九六二年にガンディー、ミケランジェロ、ミレーの各伝記が訳され、一九六三年に『ジャン＝クリストフ』、一九六九年に『魅せられたる魂』をはじめ様々な小説が韓国語版で出ている。一九八〇年代には多くの異なる翻訳がたびたび出版されている。電子書籍も出ている。オンライン上でロランの人生についての名言も共有されている。そして、海外留学生の増加とインターネット、データベースの普及により、ソ・ヨンヘなど歴史の影に覆われてきた人物のヨーロッパでの広範な活動が注目され、ロランとの関わりが明らかとなった。

日本ではロラン熱が下火になるが、韓国では関心が持続してきたことがわかる（表3）。

ロランは、フランスとドイツ、日本と韓国などのナショナリティ、エスニシティの囲い込みからは溢れ出る作家であり、今後の受けとめがどのような展開を見せていくのか、興味深い。

表4　ロマン・ロラン著作、韓国語翻訳一覧（1950年～現在）

KOLIS-NET（Korean Library Information System Network）、国家資料総合目録、国立中央図書館、教保文庫による

1950、58『ベートーヴェンの生涯』　李彙榮訳、朝鮮工業出版社文化部
1954『トルストイ伝記』『ガンディー』『ミケランジェロ』『ミレーの伝記』
1954『(伝記小説）トルストイの悲劇：人生行路の最高指針』朴靜峰訳 大東社
1957『人生の悲劇：哲人文豪のトルストイ伝記』朴靜峰訳 大東社
1958『ベートーヴェンの生涯』李彙榮訳　佛文化研究會出版部
1959『魅惑された霊魂』金光洲編　啓明文化社 1921年 玄哲
「文化事業の急務として民衆劇を提唱せよ」『開闢』第10号（1921年4月）

1960『ジャン・クリストフ』石璟澄訳 德壽出版社
1962『世界の人間像。8巻』新丘文化社
「大理石の苦悩：ミケランジェロ／ロマン·ロラン著；ユジョン訳、
大地の画家：ミレー／ロマン・ロラン著；パク·ソンリョン訳」
1962『世界の人間像。10巻』新丘文化社
「運命の壁を超えて：ベートーヴェン」鄭漢模訳
1962『世界の人間像。１巻』新丘文化社 「愛と死の巡禮者：トルストイ」、
張萬榮訳「永園の東洋人：マハトマ・ガンディー」李浩哲訳
1963、65、69、74『ジャン·クリストフ：1－3』金昌錫訳、正音社
1963『トルストイの生活と文学』吳鉉堈訳、正音社
1965『魅惑された霊魂』ゲ・ヒョンスク訳、朝鮮文学芸術総同盟出版社、北朝鮮○
1967、71、75『ジャン・クリストフ』石璟澄訳、青山文化社
1969『ジャン・クリストフ…』金光洲編、不二出版社
1969『ベートーヴェンの生涯：孤独な栄光』金五炫訳編、良書閣

1971、1974、77、78、79、82『魅惑された霊魂：1－3』金昌錫訳、正音社
1972『ベートーヴェンの生涯』李彙榮訳、文藝出版社
1972『ガンジー』朴奉植訳、翰林出版社
1973、93『ジャン・クリストフ』金ヘジン訳、東西文化社
1973『ベートーヴェン』金仁丸訳、英林社
1973『トルストイ（世界傳記文學大全集3)』徐楨哲訳、英林社
1973『偉大な芸術家の生涯：ミケランジェロ、ベートーヴェン、トルストイ』
金昭影編訳、汎友社
1973『トルストイ』徐楨哲訳、ソウル文化社
1973、77、78、87、90、2011、2013、2016『ジャン・クリストフ1－2』
孫錫麟訳、東西文化社
1974、77『(少年少女）永遠の世界の名作文庫1：ジャン·クリストフ』桂林文庫
編集委員会訳、桂林出版社　☆
1974、77、79『ベートーヴェン』鄭漢模訳、新丘文化社
1974、2006『マハトマ・ガンディー』朴錫一訳、瑞文堂
1974『トルストイの生活とその文学』吳鉉ウ訳、正音社
1974『トルストイ：荒野に叫ぶ声（新丘文庫21)』張萬榮訳、新丘文化社
1975『自叙伝、ベートーベンの生涯』ガンジー、フランクリン、ロマン・ロラン著、
金文影；金盛子共訳 凡潮社
1976、78『ジャン·クリストフ』カン·スンシク訳　新進出版社
1976、82『ミケランジェロの生涯』田相範訳 正音社
1976『コラ·ブルニョン：外』李彙榮訳 . 高麗出版社
1977『ヘルマン・ヘッセの絵手紙』ヘルマン・ヘッセ；ロマン・ロラン共著、
車京雅；盧瑞卿共訳、傳藝苑
1977『ミレー：大地の画家』朴成龍訳、新丘文化社

1977『ベートーヴェンの生涯　外』李彙榮訳、三中堂
1978『彼処に美しい国がある：トルストイの悲劇』朴炯奎訳、庚美文化社
1978、88『ジャン・クリストフ』ガン・スンシク訳、中央文化社
1978、95『ジャン・クリストフ（世界文学大全集71－73)』正音社
1978、79、96『ジャン・クリストフ（世界文学15)』黄明杰訳、金星出版社
1978、86、2002『ジャン・クリストフ』太極出版社
1978、2001『ジャン・クリストフ（文学28)』デサン出版社

1980『ジャン・クリストフ』ソン・ミョンホ訳、サムソン堂
1981『第九交響曲：ベートーヴェンの生涯と創作世界』
李彙榮、イ・ソンサム共訳編　巨岩
1981『魅惑された魂：１』キム・グァンソン訳　ベクミ社
1982『ジャン・クリストフ：1－3』方坤訳　金星出版社
1982『アンドレ・ジッドとロマン・ロラン（プルビッ14)』
Harris, Frederick John 著　曹乙鉉訳　プルビッ
1982『(中学生文庫）世界名作文学：1－35』教學社　☆
1983『少年少女世界文学全集：第7巻－第12巻』ロマン・ロラン、
イ・ジュフン訳、光音社　☆
1983『マハトマ・ガンディー』チェ・ヒョン訳　偕成社
1983『トルストイ』徐禎哲訳、韓國書籍公社
1983『ミレー』方坤訳　東西文化社
1983、84、85『ジャン・クリストフ』パク・ジェヒ訳　ヤング
1983『ジャン・クリストフ：1－3』孫錫麟訳．學園出版公社
1983『ガンジー、ベートーヴェン、ミケランジェロ傳記』
朴錫一；李彙榮；全相範 共訳 雲岩社
1983、85『ガンジー』朴奉植訳 修文書館
1984『内面の旅路』孫錫麟訳 汎潮社
1984『世界の人間像ベートーヴェン1－2』韓国教育出版公社編
1984『ベートーヴェンの生涯』チョン・ソンホ訳　養英閣
1984、86、87『ジャン・クリストフ（太極版セッピョル文庫；80)』
イ・ボウン訳　太極出版社　☆
1985、90、99、2001、2005『ベートーヴェンの生涯』新装版
李彙榮訳　文藝出版社
1985『苦悩を超え歓喜へ：ベートーベンの偉大な生涯』
李彙榮、イ・ソンサム編訳　巨岩
1985『トルストイ』徐禎哲訳 韓國教育出版公社
1985、86『ジャン・クリストフ』ファン・ミョンゴル訳；イ・ジェハ画　金星出版社
1985、1989、『ジャン・クリストフ』（少年少女）永遠の世界名作文庫；33
朴ファモク訳、桂林出版公社　☆
1986『偉大な芸術家の生涯』イ・ジョンリム訳　友草社
1987、95、2001『マハトマ・ガンディー』チェ・ヒョン訳　梵友社
1987、89、90、93改定版『ベートーヴェンの生涯、トルストイの生涯』
張炅龍訳 金星出版社
1988『ラマクリシュナ（霊魂の師匠たち３)』
パク・イム；パク・ジョンテク［共訳］　精神世界社
1988『永遠に残る人生と愛』キム・ヒョンフン編著　徳友出版社
1988『率直に始まる告白を』知文社編集部編訳
1989『詩とエッセイがある瞑想』［パンダブック編集部編］
1989『ガンジーの瞑想日記』シン・グアンヨン訳　仁王出版社
1987、89、90、92、94、96、97『ベートーヴェンの生涯』改訂版、
張炅龍訳 金星出版社
1989、90『コラ・ブルニョン（青木精選世界文学45)』キム・ヘジン訳　青木社
1989、90、92『ジャン・クリストフ』

イ・ジュンボム訳、イ・ヒョップ画 金星出版社

1990、92、93、94『魅せられたる霊魂：1－3』キム・ビョンウク訳　ガラム企画
1990、94、96、2015『ジャン・クリストフ1－3』世界名作100選40
キム・ミニョン訳、一信書籍出版社
1990、92、93、94、96、97『ジャン・クリストフ1－3』方坤訳　金星出版社
1991、95『ジャン・クリストフ』黄明杰訳、イ・ジェハ画　金星出版社
1991、93『ミレー』学園出版公社編
1992、94、2001、2011『ジャン・クリストフ：1、2』キム·ヘジン訳　青木社
1992、93『ベートーヴェンの偉大な生涯』
李彙榮、イ・ソンサム共編訳　ドゥロ
1992、93、97、2001、2003『少年少女世界文学20　ジャン・クリストフ』
ジョ・ヨンイル訳　ヨンジン出版
1992、98、99、2007『偉大な芸術家の生涯（ルビア文庫122)』
イ・ジョンリム訳　梵友社
1992『ジャン・クリストフ』キム・ナミル編　ホ・ヨンチャン画　国民書館　☆
1993『（ロシアの灯り）トルストイの生と文学』ユン·ソンヘ訳　青岩文学社
1994、95『ジャン・クリストフ（ヌルプルン文庫312)』
ガン・スンシク訳　イ・ギュソン画　中央メディア
1994、98、99、2000『ジャン・クリストフ』朴ヨンシュク、ジョン・ウォンソク訳、教学社
1994、95、98、99、2000『ジャン・クリストフ：上下』パク·ホジン訳　ヘウォン出版社
1995、2001、2002、2005『マハトマ·ガンジー』チェヒョン訳、汎友社
1995『ジャン・クリストフ：1、2、3（ホンジンエリートブックス97、98、99』
チョン·ソングク訳 ホンシン文化社
1995、96、97、99『ジャン・クリストフ（グルドンサン世界名作37)』
イ・ギョンヘ訳　グルドンサン　☆
1995『ジャン・クリストフ』チェ・グィドン訳　ヨミョン出版社
1996『ジャン・クリストフ』ユ・ハンジュン訳　デイル出版　☆
1996、97、98、99、2001、2009『ジャン・クリストフ』黄明杰訳、金星出版社
1997、2001『ジャン・クリストフ（学園世界文学全集；20)』学園出版公社編　☆
1998、2000『ジャン・クリストフ（今時代実践論述；42)』学園出版公社編　☆
1998『ジャン・クリストフ』ファン・ミョンゴル訳　金星出版社編集部　☆
1998『ベートーヴェンの愛（音楽春秋文庫21)』
キム・ウォング訳　音楽春秋社
1996、98、99、2001、02、04、05、06、10『ベートーヴェンの生涯』
イ・フィヨン訳、文藝出版社

2000、02『ゲーテとベートーヴェン：詩聖と楽声の運命的出会いと愛』
パク·ヨング訳、ウンジンドットコム
2001『魅せられたる霊魂：1－3』ガラム企画
2001『マハトマ·ガンジー（サルビア叢書；106)』チェヒョン訳、汎友社
2002『ジャン・クリストフ』ウリ企画編　キム・ジェイル画　桂林ドットコム
2002『ジャン・クリストフ（論述世界名作；58)』
キム・ジェイル画、斗山東亜　☆
2002『ジャン・クリストフ』
パク·ヨンスン編　キム・ヨンギル画　サムソン教育開発院
2002『ジャン・クリストフ：１－５（世界文学選52)』金昌錫訳　梵友社
2002、03『ジャン・クリストフ：１－３』
キム・チャンホ訳　文学芸術出版社、北朝鮮　○
2005『トルストイ評伝』キム・ギョンア編訳　巨松メディア
2005『ミケランジェロ評伝』キム・ギョンア編訳　巨松メディア
2005、06『ジャン・クリストフ』ユ・ソンヨン編
シム・ミョンソプ、ゴ・ヘジン画、　サムソンビエンシー

2006、08『ジャン・クリストフ』チェ・ギュスン編、
バンギファン訳、バン・ギファン画、韓国ヘミングウェイ
2006『ラーマクリシュナ：神話になった偉大な魂』朴・ジョンテク訳　精神世界社
2006『マハトマ・ガンディー』朴錫一訳、瑞文堂
2007、08『ベートーベンの生涯と音楽』イ・ジョンリム訳、梵友社
2007『ミケランジェロの生涯』イ・ジョンリム訳、梵友社
2007『ジャン・クリストフ（青少年世界名作９）』朴ヨンシュク訳、教学社　☆
2008、09、10『ジャン・クリストフ（論述用小学生の世界名作；38）』
イ・ヒョソン編、イ・ジソン画　ジギョン社　☆
2008、18改訂『ジャン・クリストフ：文字が音標にみえる幸せを感じて！』
ソン・ウンジン訳、朴・ギジョン画、ミレアイセウム　☆
2008『トルストイの生涯』イ・ジョンリム訳、梵友社
2008『愛と死の遊戯』ユ・ホシク訳、梵友社

2011『ジャン・クリストフ』ナ・ヘンラン編、訓民出版社　☆
2012『名場面で読む世界名作選』「ジャン・クリストフ」
パク・ジョンイム訳、ブグァン
2016『ジャン・クリストフ』世界文学全集
バン・ギファン画　チェ・グィスン編、韓国ヘルマン・ヘッセ
＊ソウル大学選定　世界文学全集
2019『ヘンデル：音楽の世界人』イム・ヒゴン訳　phono

2020『ベートーベンの生涯：30歳ベートベンの肖像　偉大な闘争』
イム・ヒゴン訳、phono
2020『ジャン＝クリストフ』ク・インファン、
ユン・ビョンロ、ホン・ソンアム監修　ナ・ヘラン編、訓民出版社
2021『ジャン・クリストフ』ユ・ソンヨン、ゴ・ヘジン訳　フクマダン　☆

eBook
2002『ジャン・クリストフ：上、下』朴・ホジン訳　バロドットコム
2002『ジャン・クリストフ』㈱インクリション
2003、04『ジャン・クリストフ』コイネットドットコム画、図書出版トマト
2004、05『ジャン・クリストフ』桂林ドットコム編集部、桂林ドットコム
2006『ベートーヴェンの生涯』李彙榮訳、文藝出版社
2006『マハトマ・ガンディー』チェ・ヒョン訳　梵友社
2006、07『ジャン・クリストフ』
イ・ヒョソン訳　イ・ジソン画／漫画　ジギョン社　☆
2007『ジャン・クリストフ』（青少年世界名作9）パク・ヨンスク訳、教学社　☆
2014『マハトマ・ガンディー』朴錫一 訳、瑞文堂
2016『トルストイの生涯』ペーパームーン
2016『偉大な芸術家の生涯』イ・ジョンリム訳、梵友社
2019『ジャン・クリストフ（論理論述スマート世界文学）』
ユ・ソンヨン編、ゴ・ヘジン画、フックマダン　☆
2021『ベートーヴェンの生涯』イム・ヒゴン訳　phono

AUDIO BOOK オーディオブック
2017、18『ジャン・クリストフ』コンテンツポータルオーディオ・ブックス

☆は少年少女向き、○は北朝鮮での翻訳出版

李珣淑作成

ジェンダー――男性と女性

さて、もう一つの大作『魅せられたる魂』（一九二二―一九三三年）は、なぜ女性が主人公になったのだろうか。日本では大正デモクラシー、世界的にはモダンガールの時代に[14]執筆が始められ、ロランも時代の変化を敏感にとらえていたことがわかる。ここでロランの着想は、魂のあらゆるヴェールをはがしていくという、独特の趣に満ちている。ロラン自身による序文を見よう。

「（中略）……今日の女性は彼女らの独立を獲得しつつある。男性はそれを発酵させつつある……」

『魅せられたる魂』の主な女主人公アンネット・リヴィエールはこの女性の世代の前衛に属する（中略）

闘う女性たちは、散在していて、そのめいめいが、他の人々を知らず、自分ひとりに頼るほかはなかったので、その試練と雄々しい孤独の生活は、同じ世代の男性の多くの人々よりも自由で雄々しい性格を形成した。

（『魅せられたる魂』序」『ロマン・ロラン全集』6、宮本正清訳、三―四頁。一九三四年一月一日、フランス語決定版の総序）

小説作品は「新しい人」をつくる。良くも悪くも、毒もふくめ創造するところがノベルたる所以であり、意義であろう。[15]

知らなかった一人の人間が私の中に忍びこんで、その血とその思想とその運命とを私のなかに滲みこませる。

（同、五頁）

アンネット・リヴィエールというフランス女性をロランは造形した。周知のように、その姓は川を意味するフラン

ス語だ。『ジャン＝クリストフ』の最期は河（大きな川）を渡って明日が生まれるシーンであったが、今度は「川」そのもののイメージが主人公となっている。そして、芸術家ではなく、内面の変化が著しい女性のドラマである。

この長い広々とした内部の「川（リヴィエール）」は、初めから終わりまで、すべての人々、もっとも親しい人々の眼をも免れて展開し、もっとも親しい人々もその流れの烈しさや傾斜には気づかないというのが、本質的性格であって、これは変わることはなかった。

（同、六頁）

こうした「魂」を主人公とした。そしてロランは弦楽器のメタファーを用い、主人公を弓だといっている。

この交響曲はもろもろの世紀の管弦楽が行なうコンサートである。私たちはつねにその断片を聞くのみで、不協和音が完全な和音に達しないうちに、弓を他の人々に渡すのである。（中略）

それがいかなるものであろうとも、この作品は音楽である。私はこれを『ジャン＝クリストフ』と同じように、「夢」の女王、私の生の「夢」である「諧和（アルモニー）」にささげる。

（同、一六頁）

アンネットは音楽家ではないが、様々な音楽を魂のなかで奏でているとロランはいう。その生涯を十一年かけて描く。この魂は、じっさいの生活では、結ばれた男性と生き方が異なっていたために別れ、一人息子を育てていく。職を得て生計を立てる。そのなかで変容していく。様々なヴェールが落ち、アンネットは「自分はリヴィエール（川）

だ」と次のように回想する。

「自分はリヴィエール（川）だ――（それは自分の名だった、源（もと）から自分の運命はそう定っていた、しかしそれはやっと今日明らかになったのだ）……「存在」の川（リヴィエール）、存在たちの川（リヴィエール）、時代たちの川（リヴィエール）、それはうねりつつ、嶮しい山腹を攀じ登る。（中略）」

（「『魅せられたる魂』四　予告する者　Ⅱ　出産　第三部　Via Sacra 聖なる道」『ロマン・ロラン全集』8、宮本正清訳、四二四頁）

ロランは、アンネットの最期に、一種異様なイメージを湧出させている。臨終の意識のなかの光景を描いているのだが、突如、川が重力に逆らい、天に向って流れていく。

突如として、急流は躍り上がり、皮膚は毛立ち、水流――血の流れの表に皺が走る……そして一挙にして、河全体が凍る、踵から額まで、それは鉄のようだ、そして山の壁に掛けた巨大な梯子のように伸びる。その梯子は真赤な鋳鉄の段からなり、その段板は一々生きた人間で作られている。（中略）

（同、四二四－四二五頁）

奇怪で、いびつな光景だ。本作が完結したのはヒトラーが政権を取り首相になった年であり、その後の暗い歴史への予兆が投影されていると見ることもできるだろう。川だと思った自分が、ほぼ同時に、大きな川の一部にすぎないと気づく。

生きた人々の中で、アンネットだった者（中略）は、葡萄の「圧搾者」の歩みが下から上ってくるのを湯気を透して見る……（中略）至上の存在は彼女をえぐり取りながら、彼女を併合する。

（中略）

「魅せられたる魂」の周期が完成する……彼女はひとつの曲がり角に、空間に架けられた梯子のひとつの環だった。登ってくる足が彼女を踏み砕きながら上る時に、段は廻りながらしっかりしている。そこで「主」は弓形に張った彼女の体を伝って深淵を渡る。彼女の生涯のすべての苦しみは「運命」の前進の曲り角であった……

「運命！　進め！　自分を踏台にしてくれたことを感謝する！……そして自分はお前について行く。自分が運命だ」

（中略）

（同、四二五－四二六頁）

魂が音を奏で、弓形の段板になっている彼女の存在を、運命の主が踏みにじりながら進んでいく。過酷なシーンだが、その運命に自分が溶け合うのみならず、自分が運命だとも表現される。

そして、川がまた空に流れていく。山の頂上に水門が開かれ、川が登っていった先から銀河が流れてくる。

愛しい人々！　おお、わたしたちの後に残るお前たち！……

「彼らはわたしたちの後に残ってはいない、彼らは先にいるのだ。（中略）わたしたちも彼らを援けるであろう。わたしたちよりも先に死んだわたしたちの愛しい人々が、わたしたちの死によってわたしたちと一緒になり、わたしたちを抱擁したように……わたしたちはいっしょに歩いていこう。同じリヴィエール……」

「さようなら、アンネット！……今や、私は了解した。

（中略）

「魅せられたる魂」は熔解した――「死」が掘る畦の中に種子は蒔かれた、大空の穴に向って、山の嶺（いただき）に――大きな水門は開かれた、そこからは銀河が流れ出て、夜に頸飾りをかけ、諸世界の蛇のように、「存在」の鐶を「無限」の牧場にくりひろげる……

（同、四二六頁）

ロランは一人の女性の魂の変容を追っていきながら、ジェンダー、人格、そして、人間以外の自然、さらには、超自然的な、重力にさからうイマジネーションまでが出会い、互いを融出させるような、ある場所にまでたどり着いている。

非暴力と暴力――文明・戦争

『魅せられたる魂』と重なる時代には、帝国主義、資本主義、社会主義、革命、紛争、経済大恐慌、異常な軍備拡張、ユダヤ人迫害に代表される人種差別、民族差別が立て続けに起こってくる。植民地統治下のインド、朝鮮半島での独立運動、満州事変の時代でもある。この時期のロランの思考、葛藤については数多くの分析、考察がなされてきた。

なお、ロランが同時代的に受け取めていたソビエト（ロシア語Cobet）は、その元の意味、評議会からとらえるのが妥当であろう。自由な労働者が集まり、自分たちのことを自分たちで決める評議、話し合いの会の意だ。権力者による支配、独裁ではなく、自発的な労働者の人びとが力を合わせているソビエトを支持したいとロランは考えた。当時のヨーロッパで、そのように考えた知識人は珍しくない。しかし、ここでもロランの発想は独特である。

私はこの時代に、社会的行動の二つの主要な経験を検討していた。インドとソヴェトのそれである。私はこの両者のいずれにも感嘆していた。彼らを知った最初の日から、私はソヴェトとガンジーを、彼らの敵にたいして擁護した。ところが歴史的宿命は彼らをして互いに敵たらしめた。そして私は、マルク（主人公アンネットの一人息子　筆者）と同じように、力のかぎりをつくして、両軍の絆（きずな）となろうと欲し、また、来たるべき幾世紀にわたって、世界の進行を粉砕しようと脅かしている社会的政治的「反動」、帝国主義的「資本主義」及び、「ファシズム」の巨大な力に対する、自由精神と組織された無産者（プロレタリアート）の二大「革命」の共同戦線を張りたいとのぞんだのであった。

ガンジー主義的インドの非暴力（ノンヴィオランス）「非承認（ノンアクセプタンス）」と組織された「革命的」暴力との相反する二つの原理の間に、外部に、調和を作り出す機会をうるためには、まずその調和を自己の内部につくることから始めねばならなかった。彼らは私の精神（こころ）のなかで、「この魂の決闘」を行っていた。その重荷を私は若いマルクの肩にゆずり下したのであった。

（「『魅せられたる魂』序」『ロマン・ロラン全集』6、宮本正清訳、一三－一四頁）

ロランの『マハトマ・ガンジー』がヨーロッパと世界で読まれ、ガンディーの活動を理解するための先駆的意義をもったこともあり、二人は信頼を深めた。ガンディーはスイスで活動をしていたロランを訪ね、ともに一週間を過ごしている。ガンディーの非暴力はその後のキング牧師の公民権運動、ネルソン・マンデラの反アパルトヘイト闘争、そして今日の環境運動にもインスピレーションを与えているが、同時代のファシズムへの対抗に非暴力をヨーロッパでうったえてもインドのようにはいかないというディレンマをロランは痛感していた。インドとヨーロッパの情勢は異なる。インドには不殺生の文化的伝統があり、多くの民衆がガンディーの声に耳を傾けるが、ヨーロッパではそうではないと思われる。ヒトラーのような暴力にいかに非暴力で対抗できるのか。ロランの四十年後に生を受けたハン

ナ・アーレント（一九〇六－一九七五年）がその後、深く思考した問題でもある。

ロランは、暴力を用いてでも自由を守る立場と、非暴力による抵抗との、いずれが「正しい」、どちらかでなければいけないということではなく、それらが重なり得る領域を模索できないだろうか、と考え続けていた。

これはいずれの側からも批判されやすく、理解も支持も得られ難い、困難な姿勢である。

ソ連では自由が制限され、とりわけスターリン以降、虐殺が横行していく。第一次大戦時にはあれほど自由、精神の独立を説いたにもかかわらず沈黙せず、もっと告発すべきではないかとロランを非難する人びとが出てくる。あるいは、フランスやロシアの社会主義者たちは、なぜもっと帝国主義、資本主義を批判し、社会主義にのめり込んで来てくれないのかと感じる。非暴力の立場からガンディーは、ソ連で行われている実験は、私は良くわからないが、暴力を用いてそれが達成されるとは思えない、とロランとの対話で答えていた。

ロランは、ヒトラー主義に対抗するためには、ガンディーの非暴力と英米の自由民主主義、ソビエト（評議会）の暴力的抵抗とを結びつけることが必要だと考えた。

だが、周知のように、独ソ不可侵条約によって彼の構想は完全な敗北、破綻が明らかとなった。そして、スターリンや全体主義体制の暗黒面を見抜けなかった甘い知識人との印象が拭えず、逆に、急進左翼からは、中途半端な作家、思想家とみなされることにもなった。

しかし、そうした見方は、真に的を射ているものだろうか。

ナチス・ドイツのポーランド侵攻、イギリス、フランスの参戦（一九三九年九月）、ナチスのパリ占領（一九四〇年六月）の後、歴史は、ナチスがソ連へも侵攻して（一九四一年六月）、ルーズベルト、チャーチル、スターリンによる米英ソ初の首脳会談となるテヘラン会談（一九四三年一一－一二月）へと展開した。

結果的に、チャーチル、ルーズベルトらによって、英米はソビエトと連合国として手を結ぶことになったのだ。ま

た、ガンディーの非暴力は、十分な武力をもちえないなかでも抵抗を支えるインスピレーションの源泉として、フランスはじめナチスに占領された国々でのレジスタンスと共振する部分があったのではないだろうか。そして、一九四四年八月、パリ解放へといたる。

きわめてデリケートな論点だが、ロランの構想は、皮肉なことに、それが打ち捨てられ、破られた後、部分的、一時的に実現したと解し得る。非暴力と暴力をめぐるロランの思考プロセスの意義の解明は、終わった問題ではなく、これからの課題であろう。

無宗教と宗教

ここまで、生と死、表現様式、ナショナリティとエスニシティ、ジェンダー、非暴力と暴力をめぐるロランの想像力を分析してきた。その力が働く場を、生なるコモンズ（リビング・コモンズ）ととらえれば、ロランはまさにこの、生動する共有可能性領域、こころのなかから出てきて外と関わりながら、常に揺れ動いている様相を生き、表現している、と見ることができよう。

一九三八年、ロランはスイスから故郷フランスに戻り、生まれ故郷に近い田舎町ヴェズレーに移り住んだ。健康をそこね、一九四〇年からは占領ドイツ軍による検閲も行われる。外部への自由な発信ができないなか、ロランは後世に遺すための研究、執筆に渾身の力を注いだ。『内面の旅路』『ペギー』など旺盛な筆力で仕事を続けたなかでも、ベートーヴェン研究は欠かすことのできない遺産であろう。

ベートーヴェンについて、ロランの音楽学者としての今日的評価は専門家に委ねなければならないが、ここでは、戦時中、自由を重んじた作家、哲学者、思想家たちが何をなしえたか、という視点から考えてみたい。

「デンマルク国の話」を説いた内村鑑三（一八六一－一九三〇年）、『武士道』を著した新渡戸稲造（一八六二－一九三

三年）はロランより少し早い生まれで、いずれもロランより先に亡くなり、第二次大戦を経験していない。西田幾多郎（一八七〇－一九四五年）は四つ下だが、ロランと同じく終戦直前に亡くなっている。西田の友人で世界的な禅思想家、鈴木大拙（一八七〇－一九六六年）は戦後も長く生きた。日本民俗学の父、柳田國男（一八七五－一九六二年）はロランより九つ下、世界的に知られるキリスト者で社会事業家、作家の賀川豊彦（一八八八－一九六〇年）は、ロランもその存在を意識し、ガンディーとも対話しているが、生年は二二年隔たっている。

彼らはいずれも活動が制限されるなかで、いっそう精神的な仕事に注力している点が、ロランと似ていた。外からは、わかりづらくとも、後の時代を準備するために豊かな想像力を発揮していた。

西田は、戦争末期まで、東洋と西洋の思想を融合し、科学技術を破壊に用いる現代文明の病を乗り越える道、新たな時代の哲学を探求し続けた。大拙は日本人が大切にしてきたスピリットの世界を、日本的霊性として明らかにしようとした。柳田は、学徒出陣、特攻などで多くの青年が命を落としてゆくなか、死んだらどうなると列島の民が考えてきたのか、全国各地から集められた口承伝承を分析し、後に名著『先祖の話』を著した。反戦運動の後、賀川は、自らの協同組合が活動停止に追い込まれるも、瀬戸内海の小さな豊島（てしま）で半幽閉の生活を送り、『宇宙の目的』の原稿に取り組んだ。人間が生き、文明を展開しているこの「宇宙」には何か目的があるのか、壮大なテーマを考察した。きわめて困難な時期にも、想像力を発揮する人びとのすそ野は、たしかに存在していた。

『魅せられたる魂』を翻訳した宮本正清もその一例である。戦時中、日本の「敵側」フランスの女性を主人公にした大作の翻訳出版を実現した。日本の出版統制の柔軟な側面も確認できるが、検閲は当然、余儀なくされた。次は一連の検閲による、最後の削除箇所である。

ヨーロッパ、アジア、いたるところに戦争と革命、人類が燃えていた、四方八方で。そして大空も、飛行機の盾

で塞がれていた。飛行機は窒息した都市の上に殺到していた。

（「『魅せられたる魂』四　予告する者　Ⅱ　出産　第三部　Via Sacra 聖なる道」『ロマン・ロラン全集』8、宮本正清訳、四二二－四二三頁。『魅せられたる魂』（七）一九四二（昭和一七）年八月。一九四〇（昭和一五）年二月二六日訳完成、一九四二年一月校了。四二五頁削除箇所）

ミッドウェー海戦（一九四二年六月）などで敗北し、東京をはじめ各都市が空襲にさらされる脅威が現実化しつつあった時期の刊行で、検閲する立場からは、「うまく」削除している。しかし、この最終巻は一万三千部も印刷された。紙の配給がコントロールされ、様々な雑誌も廃刊になっていくなかで、特筆すべきことだ。宮本は、ナチス占領下にあるフランスに思いを馳せ、「第七巻校了に際して」を記している。

（中略）

久しく文通の絶えたまま近況を知る由もないロマン・ロラン老の健康の益〻健かに、国歩艱難なフランスの現状にも拘らず翁の筆硯の愈〻旺んならんことを祈ってやまない。一昨年秋には彼地に親しく翁を訪れてその謦咳に接する喜びをさえ期待していたのに、今や翁の所在も明らかならず、拙訳の完了を報ずる道すらない。欧州の今日あるを彼独自の立場から予見してきた翁の感慨や如何に。

（『魅せられたる魂』（七）、一九四二（昭和一七）年八月、四四〇頁　旧字体は筆者により新字体に改めた）

ロランの無事を祈る切実な気持ちが現れている。

では、最後に、ロランは宗教についてどう考えていたのか、という問いに向き合ってみたい。占領下のフランスで、

ロランは自身の文化伝統に立ち戻っていく。自分はフランス人である、フランスで生まれ、フランスの伝統文化にふれて幼少期を過ごした。フランスの伝統宗教カトリックの信徒は、イエス・キリストを救い主として信じてきた。神が人となってこの世にあらわれ、ともに苦しみ、間違いを犯しこれからも犯す可能性がある人の罪、すなわち人間の負の側面を背負って、十字架にかかる。人となって自らを犠牲にする神のイメージ、観念がカトリックの伝統のなかに生きている。

人となって、すべての人、またひとりひとりの人への愛ゆえに、一瞬ごとにみずからを犠牲にする〈神〉。また、この犠牲に参与して、みずから力の限りにおいて、その犠牲に加わる信者の共同体。そういう崇高な思想。病者の寄る辺ない何時間かというもの、冷え冷えとした汎神論――健康な日々にはそれで十分なのだが――のうちには自分の味方をしてくれることがまるきり見いだせない心にとって、それはなんと慰めになることであろうか。汎神論とか、すべての存在がそのなかに吸い込まれる〈存在〉とか。それは精神的に貧困だ。もし〈彼〉と彼らとが非人格的だとしたら、なんの関心ももてない。それでは、真の問題をまるきり説明してくれない。真の問題は自我にあるのだから。――数々の自我――この限りなく多くの自我に……

（中略）わたしはいま、いのちがわたしから退き下がってゆくのを感じている。そして、もしわたしに〈実存〉の、非人格的〈存在〉の源泉が見えるとして、この人格的な自我、自我たちは、どのような源泉に由来しているのか。人格的なものが非人格的なものから生まれた、などということがあるわけがない。[16]

（村上光彦「『最後の扉の敷居で』から　8」『ユニテ』36、六三頁）

『ジャン＝クリストフ』や『魅せられたる魂』では、河を渡る、川が銀河になるなど、自然のイメージで描いてい

たのに対し、カトリックの伝統では、人でないはずの神が人格をもっている。長らくロランは、カトリックの文化を大事にしながらも、近代人としては信じがたい、という立場であった。しかし、晩年、川や海ではなぐさめがない、人は人格を有しているため、神も人格をもっているというカトリックの想像力にひかれる。人格は「たんなる自然」から生じるものではないのではと思い、心が揺れ動く。旧友で詩人のポール・クローデルのように、カトリックの信仰に回帰した知識人もいた。

だが、ロランはそうではなかった。ロラン自身の最期に接近してみよう。七八歳の彼を、より若い、四十代半ばの友人夫妻が訪ねている。

ロランは引きつづきベートーヴェンの話をしていたが、ついでだしぬけに、坐っていた肘掛椅子の肘をぐいと押して立ち上がり、相手をしていたリュシヤンの肩に手をのせて言い出した[17]――「リュシヤン、手助けをしてくれたまえ……。わたしたちのミサを捧げにいこう！」リュシヤンは彼を丈長のケープでくるんだ。ロランは彼の腕にすがって大階段を下りた。彼はピアノに向って腰を据えた。その顔は光り輝いていた。ブイエ夫妻は心底から感動して息を詰めた。

すぐさま、『ソナタ作品一一一』だとわかった。まず第一楽章が、冷え冷えと鎮まり返った絶望のたちこめる嵐を引き連れて進行した。（中略）しかしやがて、この言い表しようのないドラマは、第二楽章「アリエッタ」とともに静穏に到りついた。ロランの魂は彼の英雄の魂とぴったり寄り添っていたから、二人の聴き手にはその反響が聞こえてきた。二人が感じたことを言うなら、ロランは死から解き放たれて――そのまなざしで数えきれない深淵を測定してきた人のように――彼の心のうちに〈主〉の永遠を穏やかに確信していたのだ。

最後の幾小節かとともに歌は消え失せた。ロランは友人たちに目を向けた[18]。

（ベルナール・デュシャトレ『ロマン・ロラン伝　一八六六－一九四四』村上光彦訳、四三二頁。リュシヤン・ブイエは音楽教師、青年共産党員、当時四五歳　一九四四年一二月二四日、六日後の三〇日、ロラン逝去）

ミサは、キリストの身体を象徴するパン、血を象徴するワインを口にふくみ、神である救い主イエス・キリストと一体化する意味をもつ。信徒でなければ参加できない。ロランのいう「わたしたちのミサ」とは、自分はカトリックの信者にはなりきれていないが、ベートーヴェンとともに一体化する何かがある、という含意であろう。

ロランは肉体的な死が迫るなかでもベートーヴェンの最後のピアノ・ソナタ三二番（『ソナタ作品一一二』）を演奏できるほどの「音楽家」で、その第二楽章の最終、五番目の変奏曲は、川がさざなみを立てて流れていくようである。人格的な魂の震え、鳥のさえずり、あるいは聖なる無数の光のゆらめきのようにも感じられる。

生なるコモンズの立場からは、わたしたちと、自然、生きもの、人、つくられたもの、人知を超えるものが重なり合う領域が浮上し、複雑に変化する。ロランの想像力は、そのような無宗教と宗教が重なり合う領域において、発揮され続けている。

三　ロランと歩む明日

生なるコモンズとロマン・ロランの探求の軌跡をふりかえろう。小説家、劇作家、音楽学者、平和思想家等、ロランは様々な顔をもつが、今日、その特徴を、生なるコモンズにより再解釈できるのではないだろうか。

ロランは、生と死、表現様式――音楽と文学、ナショナリティ、エスニシティ――欧州、日韓、ジェンダー――男

人間存在のあり方	自ら	共有可能性領域	他	作品	特徴
生と死	生		死	『ジャン＝クリストフ』『魅せられたる魂』	死して生まれかわるいくつもの自分
表現様式	音楽		文学	『ジャン＝クリストフ』	文学によって音楽を表現
ナショナリティ、エスニシティ	フランス		ドイツ	『ジャン＝クリストフ』『戦いを超えて』	フランス人でありながらドイツ人を主人公に
ジェンダー	男性		女性	『魅せられたる魂』	男性でありながら女性を主人公に
非暴力と暴力	非暴力		暴力	『マハトマ・ガンジー』	非暴力と、ファシズムへの抵抗としての暴力
無宗教と宗教	無宗教		宗教	『最後の扉の敷居で』	科学的態度も宗教文化伝統も尊重

表4　生なるコモンズ（生動する共有可能性領域）とロマン・ロラン　筆者作成

性と女性、非暴力と暴力――文明・戦争、無宗教と宗教[19]の間で、この共有可能性領域を感知、発見、表現しつづけた[20]（表4）。異なると見える領域を架橋しようとし、限りない平行線と矛盾にも直面した。しかし、ただ一方にのみ軸足を置いて語り、想像することは最後までしていない。その内的、外的ドラマは、彼の作品と言葉の隅々に反映されている。

このことから、わたしたちは、とまどい、矛盾、わかりにくさ、よそよそしさを、しばしば感じることになる。ときに嵐もふく。人びとはついていけなくなり、ロランはひとり佇むことになる。

だが、ロランは境界線上に立っているのではない。ロランの場（フィールド）は川のように動いている。そして、川は茫洋とした海に流れ込むだけではなく、海から大気に、そしてまた川へと、めぐっていく。

彼は、一見、結びつけようがないと思えるものをたびたび、結びつけようと構想した。ロランの面白さ、未来性は、いずれの立場、領域にも回収されないところにある。まして特定の政治思想、経済思想の立場だけから、彼をとらえることはできない。

ロランは自ら新たな人間を描き、生きつづけた。ロランの創造活動の源泉は、生なるコモンズの想像力といえよう。そこにロラ

ンの未来性がある。

外にある対象としてコモンズを見る発想を転換し、こころの内から出てくる、あるいは、こころと外の作用によって生じてくる何かであるととらえれば、様々な分野に共有可能性領域を発見できる。重なりあっている、見えなくなっている部分にこそ、わたしたちがまだ十分につかめていない世界が待っているのではないか。

ロランは、そのような生なるコモンズの明日を予感させてくれる人である。気候変動、パンデミック、戦争と難問が山積みだが、好奇心を失わず、先人たちにインスピレーションを受けながら、今、直面している問題をどう見るか、わたしたち次第なのだ。

共有可能性領域の可視化が、きわめて大切だ。わたしたちが二極化に気を取られるとき、そこに共有可能性領域が不可視化されている。これからのわたしたちの役割は、人の想像力と世界の関係性から生じる欠かせないリビング・コモンズを見出し、活性化していくことではないだろうか。

（帝京大学教授。比較宗教文化、日本文化、文明論）

1　筆者は、複数の宗教が関わる人間経験の諸相を研究する『共存の哲学――複数宗教からの思考形式』、生きものと人との関わりから日本文化の新たな様相を総合的に浮かび上がらせる『日本十二支考――文化の時空を生きる』、死にいたる生という近代の死生観を乗り越え新たな生死観、時空論を提示する『生なる死――よみがえる生命と文化の時空』などの著作をまとめ、さらなる研究として、「生なるコモンズ」のコンセプトを提示し、『生なるコモンズ――共有可能性の世界』を刊行した。

2　Ngram Viewerの表示結果については、割り引いて見なければいけないという指摘があるが、新しい文化研究のツールとしてカルチャロミクスのアプローチが提唱されている。文化を定量的に分析する一つの方法として、一定の有効性をもっていると

いえる。

3 Ngram Viewerでのロマン・ロランのピークは筆者が生まれた一九六八年である。この年以降、世界のロランへの関心は下がり始めた。二〇一一年がその底であり、五三年間、下がり続けたといえる。

今、思えば、筆者はロマン・ロラン・ブームの残響に接した。ロマン・ロラン、『ジャン＝クリストフ』の名を、中学生くらいには意識していた。都市郊外（大阪府堺市）と田舎（徳島県鳴門市）を行き来しながら育った筆者にとって、ロランに出会うことができたのは町中の書店にあった文庫本、古本コーナーの古書など、ロラン・ブームの残滓によってだった。

首都で、学者や芸術家の家で育ったなら、同時代の学問やアートの流行を敏感にキャッチしていたかもしれない。しかし、家には、アカデミックでアーティスティックな同時代性を感じさせる蔵書やレコードの山はなかった。今日の中高生が、まずインターネットで検索するように、筆者は、身の回りから関心をひくものを探し求めた。そんなとき、小さな書店の文庫本の山、古書の雑本の森のなかから顔を出したのが、ロマン・ロランだった。高価な書籍は図書館で借りたが、これが高校生までの筆者の文化環境だった。つまり、大学や研究とはかけ離れたところで、筆者はこころを満たしてくれるものを求め、そうして出会った主要なキャラクターの一人がロランだった。

4 ロランのいう「三つの閃光」（スイスとの国境近いフェルネのテラスでの自然体験、スピノザ、トルストイ）以前の経験として注目できる。この引用箇所の前には、以下の前置きがある。

この遥かな時期をかえりみて、心を打たれることは、「我（モワ）」の広大さである。「我」は深淵から出て来た最初の瞬間から早くも、池をはみ出る大きな睡蓮の花のように現出する。

（中略）

そういう照覚（イリュミナシヨン）の一つは次のようである。（中略）今物語ろうとする照覚の特質は私の心の最も感じの深い部分に触れた。

5 この後にロランは次のように続ける。

〔『ジャン＝クリストフ』の中の〕『女友だち』の章の終りに、客間の鏡の中にグラチアの姿が見えてくるあの場面の中に、この照覚（イリュミナシヨン）のかすかな反響的な思い出が見出されるだろう。

6 ロランは「私の夢の話し相手であったヴィルヌーヴの親しい胡桃の老樹に」として、『内面の旅路』の書をスイスでの暮らし

で親しんだ樹木に献呈している。ロランの世界の豊かさを示すエピソードである。

私がヴィルヌーヴから［ヴェズレーへ］引っ越しをしたその年に、この樹は枯死した。その次の冬に、この樹が切りたおされるのを私は見た。

（『内面の旅路――生涯を回想する精神の夢』『ロマン・ロラン全集』17、片山敏彦訳、二七五－二七六頁　一九四二年、六〇歳時の回想）

7　全面核戦争に直面した人間存在を象徴的に描いたアンドレイ・タルコフスキーの最後の映画作品『サクリファイス』（一九八六年）でも、杖を象徴する枯れた松の木が植えられ、眼前に河のかわりに海が広がっており、子供がそばにいるなど、聖クリストフォロス伝説のプロットが用いられている。

8　死後の「世界」は、科学的にはアプローチし難く、あるいは、立場によってはナンセンスととらえられるかもしれない。今日の脳科学や臨死体験の研究によっても方法的な限界があるため、アクセスできない領域が残されている。多くの哲学者、思想家が考え、芸術家が表現してきたテーマである。

9　『ジャン＝クリストフ』は、ベートーヴェンが読める、ということをもって驚きを与えた作品であり、音楽と文学のリレーによって自由な魂を求めるとはいかなることかを示している。

筆者がベートーヴェンを知ったのは、小学生の頃だった。それは、聴くもの、未知のもの、としてあった。しばらくして、子供向けのベートーヴェンの伝記を読んだ。耳が聴こえなくなっても、苦悩を乗り越えて『運命』『田園』などの素晴らしい傑作を作曲した人。しかし、まだ筆者は『第九交響曲』を聴いたことがなかった。家にレコードがなかった。両親や知り合いと入った名曲喫茶で、希望のレコードをかけていい、といわれ、『第九交響曲』を希望したところ、有名な『歓喜の歌』ではなく（そのメロディは音楽の教科書に載っていて、ハーモニカで演奏したことがあった）、一楽章の繊細なトレモロと勇壮な轟きが鳴り始めた。しかし、周囲の雑踏に、いくら集中しても、途中で響くオーケストラの大きな残響しか、聴き取れない。そのうち、店を出る時間になってしまった。

中学生になって、一楽章から四楽章まで、レコードで通しで聴けるようになった。それでも、ベートーヴェンの世界は、どこか遠かった。音はそこで鳴っている。ピアノ・ソナタ『熱情』や『第九交響曲』などの凄さ、すばらしさは、それなりにわ

かる。けれども、もっと何かを知りたい。

そうしたこころに、ロマン・ロランが入り込んできた。ベートーヴェンを「読ませて」くれる。多くのレコードがなくても、その世界を言葉で、どこにもとどけてくれる。

レコードを何枚も買えるお金はなかった。フルトヴェングラーの交響曲全集をどうにか手に入れて、何度も聴いた。けれども、ピアノが弾けない、吹奏楽部でホルンしか手にしていない少年には、レコードの世界だけでは、飽きたりなかった。そこをロランの言葉が満たしてくれた。自らの言葉にできない、レコードでは物足りない、「生きたい」という気持ちの方向づけを、『ジャン＝クリストフ』が部分的にも引き受けてくれた。恋愛成就、悲恋、自死などは、この大河小説の結末ではなかった。クリストフは、生まれ、成長し、自らの人生を生ききっていた。

加えて、中国系移民ブルース・リウはカナダで育ち、フランス語ネイティブで、コンクールで選定したピアノはイタリア産ファツィオリ社製、ポーランドのワルシャワで演奏した。本来、アートや音楽には様々な文化が融け合っている。

フランス語原文では、Le bonheur est le parfum de l'âme, l'harmonie du coeur qui chante. Et la plus belle des musiques de l'âme, c'est la bonté.

映画では、是枝裕和監督がソン・ガンホを起用して『ベイビー・ブローカー』（二〇二二年）を撮り、カンヌ国際映画祭で韓国人俳優初となる最優秀男優賞に輝いた。

ロランより三六歳年少のソ・ヨンヘは、ソルボンヌ大学中退後、図書館勤務、新聞に寄稿し、ジャーナリストとなった。主に極東問題関連記事を寄稿したとされる。一九二九年、社会科学高等研究院（L'Ecole des Hautes Etudes Sociales）を卒業、大韓民国臨時政府代表としても活動した。一九三三年、李承晩とスイス・ジュネーブの国際連盟会議に参加。フランス語能力を活かし、韓国独立問題、満州事変の不当性を指摘した。

「極東問題の専門家として、第二次世界大戦を予告したりもした。一九三七年、日中戦争が勃発すると、ドイツ、イタリア、日本が軸となって第二次世界大戦を起こすことを予測した長文の記事をフランスメディア〈視線（Regard）〉に寄稿」

「一九四二年からパリが解放される一九四四年八月まで二、三年間、ドイツ、フランス、日本の監視を避けて地下生活をしながら反ナチ言論活動を繰り広げた。」

（Ｗｅｂサイト　서영해、대한민국의 독립을 꿈꾸던 불운의 레지스탕스　프랑스 한인 １００년사（「ソ・ヨンヘ、大韓民国の独立を夢見た不運のレジスタンス」フランス韓人百年史））

太平洋戦争終戦（韓国では光復）翌日の一九四五年八月一六日、ルイ・アラゴンが発行した*Ce soir*に長文の寄稿を掲載している。一九四七年に帰国、金九などと活動、一九四九年、統一政府を目指した金九が暗殺され、上海へ渡る。統一国を目指すが一九五六年以降、消息不明となる。一九九五年大韓民国建国勲章授与。韓国国立図書館「嶺海文庫」にはソ・ヨンヘが好んで読んだロラン作品が多数残存している。

（以上、Ｗｅｂサイト독립운동가 서영해 사찰한 80여년 전 佛 경찰문서 첫 확인（独立運動家のソ・ヨンヘ氏を査察した約八〇年前の仏警察文書の初確認）連合ニュースを参照）

14 女性の新たな生き方、表現が模索された時代で、第二次世界大戦後に婦人参政権の実現など様々な展開へとつながっている。

15 筆者は、トルストイ『アンナ・カレーニナ』、カズオ・イシグロ『遠い山なみの光』（長崎出身でイギリスに住むわたし（女性）が語り手）、『わたしを離さないで』（クローン人間のキャシー・Ｈが語り手）、『クララとお日さま』（フランスの少女をモデルにしたＡＩアンドロイドが語り手）などを、男性作家が新しい人としての女性キャラクターを描いた優れた例として想起する。

16 以下、ロランはこう続ける。

（中略）――こう考えてゆくと、遠いところへ連れていかれる。――すなわち、創造し（永遠に創造し）、保全し、養う〈神〉へと。それは、抽象的認識界から、愛の暖かい界へ、〈父〉――〈われらの父（パーテル・ノステル）〉［〈主の祈り〉が呼びかける相手］――の中心界へと移りゆくことだ……。

わたしのなかで、認識（理性）と愛（心情）とは――まっこうから対立しているわけではないが――それぞれ、独立した、並行的な存在を有する。

17 この直前、次のようなロランの会話が引用されている。

「晩方、暗くなって、字を書こうにも目が利かなくなると、鍵盤上に両手をさまよわせながら、彼［ベートーヴェン］の〈亡魂〉を呼びだしつつ祈ることがあって、その〈亡魂〉のなかに溶け込み、混ざり合って、しまいには自分が彼になってしまうのだ！」（中略）「わたしたちは彼の仲間として、それぞれの闘いに疲れ果てながらも目標がわかっているから、なお

も歩みを進めて彼の足跡を辿るだろうよ、わたしたちは、引き裂かれ、踏みつけられ、息も絶え絶えになりながら、打ち据えられたことでかえって誇り高く健やかになってゆくのだし、わたしたちも〈彼〉と同じく〈神〉の内に入って打ち勝つにいたるのだ」。

18 この後、以下のようにある。

（中略）

ロランにはもう、『日記』をつける元気も薄れていた。それでも、これだけは書き留めた――そしてこれが最後の一行となってしまった。「親切なミジェンヌのブイエ夫妻が、このほどわが家でクリスマス・イヴを過ごした」。

19 フランスの場合、民衆を意味するギリシア語に語源をもつライシテに相当。

20 他にも、ロランについては精神と物質、民衆と富裕層、世代間の問題等について考察しなければならないが、今後の課題としたい。

参考文献　丸括弧内は原著出版年

ロマン・ロラン『魅せられたる魂』（七）宮本正清訳、岩波文庫、一九四二（一九三三）年

ロマン・ロラン「『魅せられたる魂』序」『ロマン・ロラン全集』6、宮本正清訳、一九八〇（一九二二－一九二七）年

ロマン・ロラン「『魅せられたる魂』四　予告する者　Ⅱ　出産　第三部　Via Sacra 聖なる道」『ロマン・ロラン全集』8、宮本正清訳、一九八〇（一九三三）年

ロマン・ロラン『内面の旅路――生涯を回想する精神の夢』『ロマン・ロラン全集』17、片山敏彦訳、一九八〇（一九四二、一九五九）年

ロマン・ロラン「『ジャン＝クリストフ』八　女友だち」『ロマン・ロラン全集』3、片山敏彦訳、一九八一（一九一二）年

ロマン・ロラン「『ジャン＝クリストフ』十　新しい日　第四部」『ロマン・ロラン全集』4、片山敏彦訳、一九八一（一九一二）年
村上光彦「『最後の扉の敷居で』から　8」『ユニテ』36、ロマン・ロラン研究所、二〇〇九年
ベルナール・デュシャトレ『ロマン・ロラン伝　一八六六－一九四四』村上光彦訳、みすず書房、二〇一一（二〇〇二）年
村上光彦「ロマン・ロラン『ヴェズレー日記　一九三八－一九四四年について』」『ユニテ』40、ロマン・ロラン研究所、二〇一三年
シッシュ由紀子「ロマン・ロラン研究に新たな息吹き」同
シッシュ・ディディエ「ロマン・ロラン～聞き手として、証人として『ヴェズレー日記（一九三八－一九四四）』をめぐる考察」『ユニテ』43、シッシュ由紀子訳、ロマン・ロラン研究所、二〇一六年
エレッ・エイデン&ジャン＝ベティースト・ミシェル『カルチャロミクス――文化をビッグデータで計測する』阪本芳久訳、草思社、二〇一六（二〇一三）年
濱田陽『生なるコモンズ――共有可能性の世界』春秋社、二〇二二年

参考Ｗｅｂサイト

Autour d'une vie coréenne / Seu Ring-Hai　Source gallica.bnf.fr / Bibliothèque nationale de France
https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k11836634.r=Autour%20d%27une%20vie%20coréenne?rk=42918;4
Bruce Liu Interview with Aleksander Laskowski　2021/12/03　https://www.youtube.com/watch?v=N8iJ2zqXDqg
Google Books Ngram Viewer　https://books.google.com/ngrams/
「나는 파리의 독립운동가」서영해 활약상 프랑스서 재조명（「私はパリの独立運動家」ソ・ヨンヘの活躍ぶり、フランスで

再照明）連合ニュース、二〇一八年二月二八日付　https://www.yna.co.kr/view/AKR20180228010000081

독립운동가 서영해 사찰한 80여년 전 佛 경찰문서 첫 확인（独立運動家のソ・ヨンヘ氏を査察した約八〇年前の仏警察文書の初確認）連合ニュース、二〇一九年二月一八日付　https://m.yna.co.kr/amp/view/AKR20190217055200081

서영해、대한민국의 독립을 꿈꾸던 불운의 레지스탕스　프랑스 한인 １００년사（「ソ・ヨンヘ、大韓民国の独立を夢見た不運のレジスタンス」フランス韓人百年史）　http://www.coreens.com/part1/918

本論考は、二〇二二年一一月一三日（日）、アンスティチュ・フランセ稲畑ホールにて開催された「ロマン・ロラン研究所公開講座」の同タイトルの講演に加筆修正を加えたものである。「ロマン・ロラン著作、韓国語翻訳一覧（一九五〇年～現在）」の作成、及び、ソ・ヨンヘについての研究状況の理解について、李珣淑氏の協力を得た。

ロマン・ロラン研究所設立五〇周年記念

「古都・京の記憶に残すべき戦時の日仏交流」――関西日仏学館

ジュール・イルマン、加賀美幸子、宮本ヱイ子

司会　和田義之

和田：本日はお忙しいところお集まりいただき、まことにありがとうございます。ただいまより、ロマン・ロラン研究所、設立五〇周年記念企画「古都・京の記憶に残すべき戦時の日仏交流」を開催いたします。予想より大勢の方にお越しいただきありがとうございます。会場の構造上、窓は開けられないのですが、会場の入り口の扉を開けております。またエアコンが二台稼働しておりますのでできるだけ換気に気を付けて運営していきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。マスクについては、代表の発言者につきましては、マスクを取らせて発言させていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

はじめに、本日の会場、アンスティチュ・フランセの館長であり、在・京都フランス総領事であるジュール・イルマンさんに開会の挨拶をいただきます。イルマンさん、どうぞよろしくお願いいたします。

イルマン：皆様、こんにちは。今、ご紹介にあずかりましたフランス総領事のジュール・イルマンと申します。そして、アンスティチュ・フランセ関西－京都に（私は関西日仏学館と呼んだ方が良いかと思いますが）ようこそお越し下さいました。本日は、宮本ヱイ子様をはじめ、ロマン・ロラン研究所の会員の皆様をお迎えできますことを大変うれしく思います。ロマン・ロラン研究所と関西

日仏学館の間には深い関係がございます。宮本正清様は第二次世界大戦中も関西日仏学館の事務局長を務められました。改めて皆様に厚く御礼申し上げます。

私は総領事であり、館長をほぼ三年間勤めてまいりました。今日はこうして皆さんが集まって、私の大好きな建物で、関西日仏学館の歴史についてのお話を聞くことができることを大変うれしく思っています。ここは、一九三六年に建てられて以来ずっとフランスの文化を発信するために使われており、フランス語に関する講座も開いております。コロナでたいへん困難な時期ですが、その間、関西日仏学館のイベントの企画をたくさん練ってきました。皆さん、これからもたくさんのイベントを開催いたしますので、よろしくお願いいたします。それでは、本日のイベントを始めましょう。ありがとうございます。

和田：ありがとうございます。今日の企画につきましては、本来は今年の二月に開催を予定しておったものですが、コロナの関係で延期ということになりまして、今日ようやく開催に至ったというものでございます。

今日の段取りについて最初に少し説明させていただきます。お手元のレジュメに今日の進行を記載させていただいておりますが、パネルは三部構成となっております。第一部と第二部では京都とフランスの交流史、関西日仏学館の歴史と役割につきましてパワーポイントのスライドを使いながら、主に当財団の業務執行理事の宮本エイ子さんと、先ほどご挨拶いただきましたジュール・イルマン総領事から話していただくことになっております。第三部におきまして、戦時の弾圧等に関して加賀美幸子さんから宮本正清氏の詩の朗読をいただき、またトークということでお話をいただいたうえで、当財団の西成理事長より、当財団の戦後における歩みについて説明をいただくという流れになっております。最後に質疑を入れまして一六時には終了するという見込みでおります（西成理事長による財団の歩みと質疑応答は本誌では省略）。どうぞよろしくお願いいたします。

パネルに入る前にパネリストのご紹介をさせていただきます。まず初めにジュール・イルマンさん、さきほど

開会の挨拶をいただきました、在・京都フランス総領事でありましてアンスティチュ・フランセ関西の館長であります。フランスの外交官であり、元経済官僚でございます。日本やフィジーでの在外勤務、パリの外務省の本省勤務などを経て二〇一九年より在・京都総領事、現職、ということで、今日はフランスの観点から見た日仏交流の歴史、京都との交流について、またその民間外交、民間交流についてお話しいただきます。よろしくお願いいたします。

続きまして加賀美幸子さんです。NHK元エグゼクティブアナウンサー（理事待遇）ということで、朗読の名手で知られ、日本ペンクラブ編集の『読み聞かせる戦争』の選者であります。今日は、戦時中の宮本正清氏の詩をいくつか朗読いただくとともに、『読み聞かせる戦争』の選者になられたきっかけについてもお話しいただくことになっております。どうぞよろしくお願いいたします。

加賀美：よろしくお願いいたします。最初わたくしも一部と二部は会場のみなさまと一緒にひたすら勉強させていただきます。そして三部には詩を朗読させていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

和田：宮本エイ子さんです。当研究所の理事でございます。『京都ふらんす事始め』の著者であり、宮本正清氏の配偶者であります。今日は京都における日仏交流につきまして、明治時代までさかのぼって資料を交えてご報告いただくとともに、関西日仏学館の歴史についても、またその中でも宮本正清氏の役割についてもご報告いただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

最後にご紹介することになりました西成勝好さんであります。当財団の理事長であります。大阪市立大学の名誉教授でもあります。今日はロマン・ロラン研究所の歴史と日仏交流に果たした役割について少しお話を伺うことになっております。どうぞよろしくお願いいたします。

それではパネルの第一部に移ります。ここで、加賀美先生と西成先生はいったん御降壇いただくということでよろしくお願いいたします。

では、第一部「古都・京のフランス交流史」に入っていきたいと思います。実はここに一冊、私の手元に『京都ふらんす事始め』がありまして、出版が一九八六年ということになっております。著者は先ほど紹介しました宮本エイ子さんです。今日はこの本の内容も含めてスライドで紹介しながら、主に明治維新からまず戦争に至るまでの京都におけるフランスとの交流史についてお話しいただこうと思っております。それでは宮本さん、よろしくお願いいたします。

宮本：今日の表題「古都・京の記憶に残すべき戦時の日仏交流」――関西日仏学館――、この本題に至るまでの「京都とフランスの交流」について、その曙、スタートからいくつかの道標をご紹介しながら、戦時の日仏交流、ここでは関西日仏学館をフォーカスさせていただきたいと思います。

その前になぜわたくしが『京都ふらんす事始め』を上梓したかを申し上げたいと思います。すでに今日、ご紹介いただいております通り、わたくしは宮本正清の配偶者であります。ええーと思われましょうが二世代の年齢差を超えてここに座っております。そのことだけを覚えてくださって今日お帰りになられるのでは……。宮本は関西日仏学館の創設から半世紀にわたって亡くなるまでかかわってまいりました。ロマン・ロランを敬愛し、その著作を日本人に伝えるため生涯翻訳し続けました。本国フランスにもなく国際的にも例がないといわれる四三巻のロマン・ロラン全集を仲間とともに翻訳出版いたしました。同時に彼の職場であった関西日仏学館、これについてはまるで自分の分身であるかのように愛しさを込めてよく話しておりました。生前中はいつか何らかの形で語りたいとは申していましたが果たせず旅立ってしまいました。極東の古都に初めて設立された異文化、西洋文化の華であるフランス、その拠点が京都に灯りました。彼の遺品となった紙切れの束は残念ながら雲散霧消となるでしょう。それに思いを馳せたわたくしは、その一枚一枚を確認し、補充すべき事項を文献に当たりながら資料化の準備をはじめました。研究者や学者の論文ではなく生活の中から発生したフィールドワーク的なものです

が、これまで京都とフランスの交流をまとめたものは全くなく、そのことも私の背中を押したのです。

「京都とフランスのこと」をまとめた『京都ふらんす事始め』、地元紙京都新聞が大きく取り上げてくださり出版社も宣伝チラシとして利用されました。

京都の地を踏んだ初めてのフランス人は誰？
レオン・ロッシュ　フランス公使

交流の産声は

時代は、王政復古を宣言し成立した維新政府と退廃した幕府が存立、前者にイギリスが、後者にはフランスが微妙に絡み対立しながら幕末の激動が続いていました。維新政府が正統政府として新政府を認めさせるためにとった外交、それはフランス、イギリス、オランダ公使たちを京都にいる天皇に会わせることでした。図らずもそのことが外国人に「足を踏ませるな」の禁断の地、京都に足を踏み込ませる結果となりました。「フランスと京都の交わり」の幕開けです。堺では土佐藩士たちがフランス水兵たちを殺傷したいわゆる堺事件が起きたころです。

世情はまだ「攘夷、攘夷」と叫ぶ物騒な空気が漂っていました。

維新政府の接待係のトップは後藤象二郎、大久保利通、木戸孝允の三人が務め、朝廷は審議事務局に「無事・安泰」を加持祈禱させながらこの日を待っていました。

一八六八年（慶応四年）二月末、御所では紫宸殿、朝見の儀が挙行されようとしています。天皇は風邪で微熱があったにもかかわらず、岩倉具視の強硬な指示のもとに、三国のうちフランス、オランダの二国の公使がじりじりするほど長く待たされた挙句の果て、イギリス公使パークスの姿がないまま朝見の儀が執り行われました。

フランスのレオン・ロッシュ公使とオランダのポルスボック代理公使は、粛々と直衣姿の若干一六歳の天皇の前に進み出ました。それは政治の舞台が大回転した絵巻物の一コマです。

これが京都とフランスの交わりの歴史的幕開けとなり、

これからつながれようとしております。

他方、イギリス、パークス公使一行と言えば、彼らは宿舎の知恩院から新門前縄手に差し掛かった時、攘夷派浪士数人に切り込まれたのです。暴漢の一人はその場で首を落とされイギリス側に検分のため持ち帰らせました。あとの二人はさらし首になりました。パークスたちは御所へ行くことを断念、宿舎へ引き返しました。

イギリス公使の朝見の儀は行われませんでした。

京都の地を初めて踏んだのは外交官のレオン・ロッシュ。彼が宿泊していたところは薩摩藩見張りの相国寺です。

彼は一八六四年（元治元年）第二代フランス公使として横浜に着任。当時はまだ江戸色濃く、ヨーロッパから四か月の船旅を要し、本国に連絡するというより外交官としての個人手腕により任務を果たしていました。彼の老練な外交手腕で幕府との良好な関係を保っていたようです。フランスの横賀製鉄建設、フランス語学校の設立も手がけました。当然二週間前に起こった「堺事件」の対応にも当たり、任務を遂行しました。

堺事件で亡くなった方々の供養は今も続いており、フランスの総領事のイルマン氏も毎年法要に参列し、神戸の外国人墓地で献花されています。

フランスへ留学した最初の京都人は？ 西園寺公望

そのころの留学生は特権階級の宮家、公家でしたが、京都においては特殊で東、西本願寺僧侶たちも留学しました。

一八六八年（明治元年）大久保利通が若い公家の西園寺公望らを海外へ留学させるよう岩倉具視に建議しました。一八七一年（明治四年）京都人としてはじめて西園寺公望が政治、法律のためフランスへ留学します。

西園寺は一八四九年（嘉永二年）右大臣徳大寺家の三男として生まれ、幼少より福沢諭吉の「西洋事情」に強い関心を持っていました。長崎の広運館[1]で京都でのフランス語教育の礎を築いたレオン・デュリー[2]にも学びま

した。

ソルボンヌで法学士となって卒業し、中江兆民などの留学生と親交を結びます。フランス首相となったクレマンソーやゴンクール兄弟とも親交を持ち、日本の和歌八五首をジュヂエット・ゴーチエ[3]と仏訳した合作、版画つき「蜻蛉集」（一八八五年）を刊行します。パリに日本趣味をもたらすきっかけを作り、フランスの自由思想を身につけ、一八八〇年（明治一三年）九月帰国しました。

京都に帝国大学ができたその設立案は、一八九六年（明治二九年）文部大臣の時、帝国議会の協賛を得て一八九七年（明治三〇年）、京都帝国大学が設置されました。西園寺は日本の近代化に欠かせぬ偉人となり、学問の都京都を創るうえでもフランスの自由思想を根付かせました。

京都策とレオン・デュリー

西陣織

天皇の東京遷都がもたらした明治初めの京都の混乱が千年の都を守ってきた民衆に与えた衝撃は計り知れませんでした。天皇とともに公家、諸侯、官吏、有力商人たちはこぞって移動したのです。人口は急激に減少し、政治、経済が京都の町から消え、まるで空気の抜けた風船玉となってしまいました。新政府、京都府は喪失感漂う人心の不安を取り除き活気を与えるため、京都策と称する三本の柱、産業、教育、市街整備の政策を打ち立てました。

産業ではまず博覧会[4]を開催することから始めました。

博覧会場を訪れたレオン・デュリーは西陣織の優美で繊細な織物に注目、感嘆するが、織機の非効率はフランスのジャガード織機から五〇年遅れていることを京都府に進言したのです。それを受けて京都府はジャガード織りの研修と購入のため留学生を選びました。当時の西陣業界は「選ばれたらどうしよう」の戦々恐々の状況だったようです。海の向こうへ行くことは当時「死の盃」を意味するからです。

一八七三年（明治六年）、佐倉常七、井上伊平衛、吉田忠七の三名が織機の研修と購入のためフランスへ派遣さ

れることになりました。

言葉の問題など苦難の連続でしたが、八か月の研修を終え、佐倉、井上は無事帰国しました。自らフランス行きを希望した吉田はさらに三か月の期間延長を求めて滞在し、満足ではありませんでしたが一応の成果を上げ、一八七四年（明治七年）二月一日帰国の船に乗り、三月一三日香港でニール号に乗り換えます。

乗船名簿に「年齢三〇、仏国に在留すること一三か月本便帰港せるなり」と記されています。

ニール号は嵐のなか伊豆沖で座礁。救助された人はほとんどフランス人でしたが、日本を真近にして三〇歳の吉田はどんなにか悲しく無念であったでしょうか。購入した織機などとともに大海に散りました。この悲劇は人々の胸を後々まで突きました。

フランス語学校

京都策のもう一つの柱は教育です。京都の最初のフランス語教師になるレオン・デュリーの役目は教育と府へのアドバイスでした。府は全国に先がけて小学校を作り、中学校を国から引き継ぎ西洋人を招き、語学や化学の授業のカリキュラムを立て、欧学舎として英語、ドイツ語、フランス語のクラスを設けました。フランス語に関しては、英国領事のエーブル・エーゼ・ガーワルの紹介でレオン・デュリーを雇入れることになりました。ここに京都のフランス語教育の礎が築かれようとしています。

レオン・デュリーは一八七一年（明治四年）末、翌一八七二年（明治五年）一月から一八七五年（明治八年）一月までの契約で京都住人第一号となり、東山知恩院内華頂宮宮廷内に仏学校教場が新設されます。欧学舎は一〇歳から二五歳まで。時代は西洋文明吸収熱にあふれ、フランス語六七名、そのうち女子は五名、寮制でしたが通学も可で、在学は三年、春秋、優劣判定し等級を定め、試験日は知事なども参加し優秀なものには褒美を与え、帽子に金や赤の飾りをつけるほどでした。教室には教科書をたくさん備え、地球儀など豪華な備品を備え環境を整えていました。無届欠席は掃除などの罰則がありました。デュリーは四時に起床、礼拝を終えると教室に入って生徒の復習、そして、朝食。九時にはフランス語、午後は

歴史、地理、理科の授業、語学の会話、そして運動場で弓・剣道、笛、太鼓を使うフランス式教練を教える盛りだくさんな授業です。

単なるフランス語教師でなく西洋事情、人生哲学全般を教授。人柄は清廉潔白。

レオン・デュリーの進言で知事の槇村正直はフランスへ殖産興業や美術習得のために八名を留学させました。

一八七七年（明治一〇年）一一月、織物：近藤徳太郎、鉱山：歌原十三郎、製糸撚糸：今西直次郎、製麻：横田万寿之助、染色：稲畑勝太郎、陶器：佐藤友太郎、機械：中西米三郎、美術：横田重一たちの留学生が選出されます。

この中に関西日仏学館設立につながる稲畑勝太郎がいました。

一八七七年、レオン・デュリーは日本滞在任期となり、夫妻は京都府選出の留学生八人を引率して横浜を出帆しました。

フランスでも同様、留学生たちの指導に父親の如く当たり、マルセイユの日本名誉領事の任と勲四等旭日章を与えられました。一八九一年（明治二四年）、臨終にあって「軍人は戦場で死するを本懐とする。自分は領事館で死にたい」という強い希望に家人はやむなく日本領事館へ移し、その三日後、息を引き取りました。

彼は京都のフランス語教育の礎とフランス文明の普及と京都の西陣織の近代化に貢献しました。

彼への感謝は教え子たち関係者が不朽のものとするために自然石に刻み、一八九九年（明治三二年）一〇月、南禅寺稲畑邸に置かれました。のち現在のアンスティチュ・フランセ関西の庭園に設置されています。

和田：宮本さん、ありがとうございます。京都といえば、幕末以降、全部東京に持っていかれて、あとどうなっていたのか、私もなかなか知らなかったところなんですけれども、京都の三策ということで、産業を作っていったということ、そのなかで、フランスとの交流が非常に大きな役割を果たしていたということが、非常によくわかりました。ここで、先ほどの宮本さんの話にもあった「堺

事件」について、祈念法要にジュール・イルマンさんも出席されておられるので、そのときの話をお話しいただこうと思うのですが、その前に堺事件のことを少しだけご説明させていただきます。

一八六八年（慶応四年）に、先ほどの宮本さんのお話にもありましたが、慶応四年には、関西地区では三回、外国人の殺傷事件がありました。ハリー・パークス英公使襲撃事件、神戸事件、そしてもう一つが堺事件でございまして、堺においてフランス人の水兵が上陸してきたとき、ちょうどそのころは鳥羽伏見の戦いが終わったばかりで、土佐藩が堺の警護にあたっていたんですけれども、フランス人の水兵一一名が殺傷されたという事件です。それを受けてフランスが抗議をして、殺傷事件にかかわった土佐藩の二〇名が捕らわれて死刑という処分が下され、堺にある妙国寺で二〇名が切腹を命じられたという事件であります。二〇名が並んで切腹していくんですけど、一一名までいったところで、見守っていたフランスのレオン・ロッシュ公使が「これは残虐すぎて耐えられない」ということで残りの九名は放免になったということで、切腹はあとの方がいいのか、というところではあるんですけれども、そのような事件であります。

その後、当該事件は忘れてはいけないということで、堺市のほうも法要を始めるようになったとお聞きしております。二〇二〇年二月二三日に妙国寺で祈念法要が行われ、そこでイルマン総領事も挨拶されておられるということです。ここで、ジュール・イルマンさんに、法事に参加されたときの様子と参加されたときのご感想も含めてお話しいただきたいと思います。総領事、よろしくお願いいたします。

イルマン：ありがとうございます。そうですね、毎年、堺の妙国寺で亡くなったフランスの水兵、そして日本の侍のための法要がございまして、フランス人のため、日本人のためだけではなく、フランス人と日本人の両方のための法要を妙国寺で行っておられます。事件から一五二年経ちましたが、毎年法要が行われ、二〇二〇年二月二三日にご招待いただき、法要に参加いたしました。法要の行われた妙国寺は、当時の土佐藩の侍が切腹を行っ

たところです。本当に感動しました。法要のあとは堺事件が起きた現場も訪れました。堺市はかなり変わりましたけれども、今も事件現場にはいろいろ説明が添えられ、それにとても感動しました。

外交官として思うことは、戦争を起こさず、命が失われないように対話や情報交換を行うということが、外交の上で一番大切な仕事の核心であるということです。残念なことに堺事件の起こった当時は、本当にそうした情報の交換がうまくできておりませんでした。堺の港は開港していると公表されていたのに土佐藩の侍にはその情報がうまく伝わっておらず、一方フランス人はもう港は開港されているという情報を入手していたので入港し、このような悲惨な事件が起きてしまいました。堺事件は、外交の真髄や戦争をいかに早く終結させるのかを強く語りかけていると思います。正しい情報のやり取りができていれば戦うこともなかったはずです。しかし、当時は状況的に大変難しかったと思いますが、堺事件は非常に悲劇的な幕末の出来事です。

また、ヨーロッパの第一次世界大戦の終戦記念日である一一月一一日には毎年ドイツの総領事と「第一次世界大戦終戦記念、及び戦没者追悼のための仏独共同記念式典記念」を行っております。平和祈念式典として、神戸の外国人墓地で行っております。その同じ墓地内に「デュプレックス」（堺事件のフランスの艦船）の亡くなった水兵たちの慰霊碑があり、毎年献花を行っております。

和田：ありがとうございます。イルマンさんにはですね、また後ほど、民間交流の役割についてお話しいただくことになっております。

では、本日の第二部に移っていきます。関西日仏学館の歴史と役割についてでございます。第二部のメインスピーカーは、第一部に引き続き宮本ヱイ子さんにお願いしております。宮本さん、どうぞよろしくお願いいたします。

関西日仏学館設立　稲畑勝太郎と駐日フランス大使 ポール・クローデル

関西日仏学館　設立

一九二六年（大正一五年）、提唱者フランシス・リュエラン[5]の趣意書にもとづいて詩人大使ポール・クローデルと大阪商業会議所会頭稲畑勝太郎の賛同、協力によって、「日仏文化協会」と称する財団法人が設立され、そのもとで関西日仏学館が運営されることになりました。「日本文明とフランス文明が交流できる施設があることが望ましい。日本人はフランス文明を、フランス人は日本文化をそれぞれ知る共通の場所を得ること。語学、文学にとどまらず広範囲に地理、歴史、美術、音楽、哲学、社会生活などフランス文化全般を講義する」

一九二六年二月新設の東京日仏会館に研究員として三二歳の地理学者フランシス・リュエランが着任、滞在することになりました。早稲田の大学生だった宮本正清がアルバイトとして雇われます。一九二一年（大正一〇年）詩人で劇作家のポール・クローデルがフランス大使として着任し、リュエランが主唱者となって作成された日本語、フランス語両語の趣意書を稲畑勝太郎らの大阪実業家たちに送付されます。呼びかけ人は政、財界人、学者文化人たちのトップが綺羅星のごとく名を連ねています。とりあえずは比叡山夏期講座で、予想外の基金が集まりました。比叡山の夏期講座は一気に拡大して、京都府宇治群山科村大字日ノ岡エビス谷一七－二二、九条家に属していたので俗称九条山、約七六〇坪、に建設することになったのです。これは著名な詩人大使の推進した置き土産とされたほどクローデルの名声は大きかったのです。

戦時の関西日仏学館

戦時の学館もほとんど休館することなく授業が続けられました。学館の館長マルセル・ロベール[6]、ジャン・ピエール・オーシュコルヌ[7]、吉村道夫、宮本正清の四人でした。

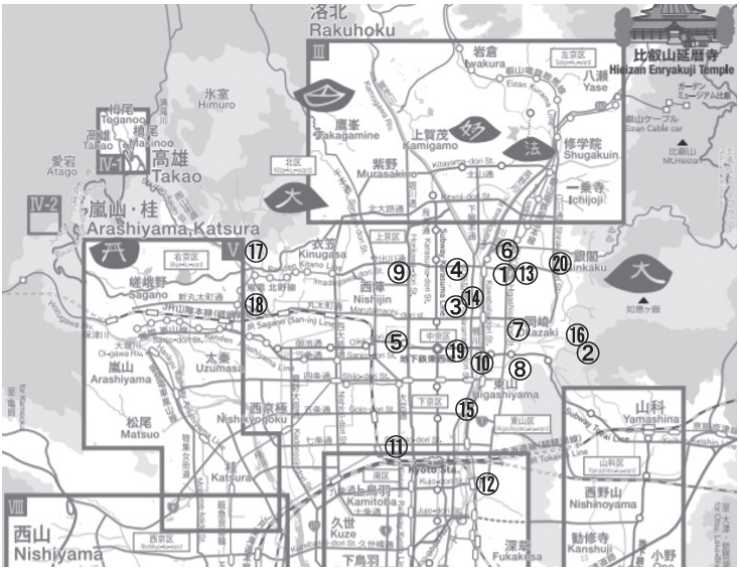
マルセル・ロベールは大学教授資格を持ち文学、ヴァレリーや英文学、ラフカディオ・ハーンなど多くの論文

やエッセイ、小説も書いていました。大正末すでに来日、一九二六年四月から一九二九年（昭和四年）八月まで第三高等学校、京都帝国大学でフランス語、文学を教え、東京では日仏会館研究員として、アテネ・フランセ、第一高等学校、帝国大学などで教鞭をとっていました。厳格な学者で物静かな人格者で、歴代で最も尊敬された館長の一人でありました。

オーシュコルヌは創立時一九二七年（昭和二年）時のフランス領事のアルマン・オーシュコルヌの息子で、日本文化にあこがれ二三歳の時来日、領事館の書記、静岡高等学校のフランス語教師をして一九三八年（昭和一三年）関西日仏学館教授として就任しました。格好いいフランス人として人気を博したようです。

一九四〇年（昭和一五年）六月、フランスはドイツに降伏、隣の日独文化センターはドイツの勝利を祝してナチスドイツの旗を掲げていましたが、日本の新聞はあたかも学館の頭上にはためいているように写真を撮り新聞に掲載したのです。この日、狩野直喜博士[8]が紋付袴の礼装で来訪し、「フランスは陥落してもフランス文化は滅ばず」の名言を発しました。その時、警察の者が来て「学館を閉館するのはいつか」と問い、館長は「学館の閉館は考えていない、これまで通り続ける」と答えました。このフランスの敗北以後、ドイツ、イタリアと日本の三国同盟で状況はますます厳しくなっていきました。「いかなる逆境にもめげず。平和の小島としてとどまろう。日仏文化親善の小さな証であり続けようというのは賭けかもしれない。持ちこたえられたのは変わらずずっと通ってくる学生たちの眼差しのおかげで私たちは自らの仕事に寄せる信念は強まっていった。一方この学生たちの中にはいつ何時召集されるかわからないものが多くいるのに、フランス語、文化を勉強するのは、憎しみと死の世界にあっても、ある精神的よりどころを求めているのだろうか?」とオーシュコルヌは述懐しています。

一九四五年（昭和二〇年）、ついに関西日仏学館は島津製作所の軍需産業の作業場として接収されました。そしてオーシュコルヌと宮本正清はなんの理由も示されることなく逮捕され投獄、拷問の日々となり、終戦まで暗黒の二か月がつづきます。



京都のなかのフランス歴史散歩

＋無断転載、コピー厳禁。作成技術：木下ひろみ、難波華子

① 現　関西日仏学館　一九三六年　フランス総領事館
② ヴィラ九条山　旧関西日仏学館（一九二七）
③ 御所（京都を初めて訪れたフランス人、レオン・ロッシュ朝見の儀　一八六八年）
④ 相国寺（レオン・ロッシュの宿泊先　一八六八年）
⑤ 二条城（徳川幕府　幕末とフランス）
⑥ 清風荘（旧西園寺公望邸　京都からの第一号フランス留学　一八七二年）
⑦ 西本願寺、知恩院、建仁寺（第一回京都博覧会　京都近代化へ向けた博覧会会場跡　一八七二年）
⑧ 華頂学園（華頂宮旧邸跡、レオン・デュリーの仏学校、仏語教育の礎を築いた　一八七四年）
⑨ 西陣（ジャガード織の研修及び織機の輸入　一八七二年）
⑩ カトリック教会（ヴィリオン神父　仏語教育及びカトリック教の布教活動　一八九〇年）
⑪ 西本願寺（飛雲閣　エミール・ギメと高僧との仏教問答の場。クローデル絶賛の障壁画）
⑫ 三十三間堂（ピエール・ロチが驚嘆した一〇〇一体の仏像）
⑬ 京都大学（西園寺公が京都帝国大学の設立を提案。日仏協会創設の教授たち在籍　仏文科講座、日仏文化交流人材）
⑭ 京都府立医科大学（療病院医学校　レオン・デュリーが教鞭をとる）
⑮ 四条かわら（リュミエール兄弟が発明した映画輸入、稲畑勝太郎が試写した）
⑯ 何有荘（関西日仏交流の父　稲畑勝太郎旧邸　和楽庵）
⑰ 龍安寺
⑱ 富田渓仙、山元春挙、竹内栖鳳　嵐山　別荘
⑲ 京都市役所　京都・パリ友情盟約　一九五八年
⑳ 疏水インクライン（京都策事業）

それでも二人は生きて終戦を迎えられましたが、吉村道夫は召集され、「愛するフランスに敵対するから」という理由でインドシナ占領に協力を拒み、そして中国で戦死しました。

戦後は宮本正清は大阪市立大学文学部教授として迎えられました。

このほかの「京都とフランスの歴史」については、ここでは紙面の関係上、フランス交流のゆかりの地を地図上で表しました（前ページ）。詳細については拙書『京都ふらんす事始め』第一章「京都とフランス」をご参照ください。

本日のアンスティチュ・フランセ関西の館長ジュール・イルマン氏に感謝を申し上げます。

和田：宮本エイ子さん、ありがとうございました。私も全然知らないことばかりでとても勉強になりました。最後の京都のなかのフランス歴史散歩、京都って平安時代の史跡が多いというイメージなんですけど、いま見させていただくと、フランスの歴史散歩ということで二〇か所あるんですね。明治以降の交流が後付けられるような場所が二〇か所もあるということ、いかに素晴らしい土地柄なんだなということがわかりました。本当にありがとうございました。

ここで、イルマン総領事にお聞きしたいんですけど、これまで宮本さんにお話しいただいた、日仏交流の歴史、明治維新からですね、戦中戦後にかけて交流されてきたという内容を踏まえて、総領事の立場から、そしてアンスティチュ・フランセの館長という立場から、いろいろと民間における交流を見てこられていると思うんですけれども、民間における国際交流の意義ですとか、フランスからみた京都のイメージ等も含めてですね、ざっくばらんなところをお話しいただければと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

イルマン：ありがとうございます。まずは、本当に宮本さんに感謝を申し上げたいと思います。そして、関西日仏学館とこれほどまでに深い関係のある方もいらっしゃらないと思います。宮本さんのお話を聞けて大変うれし

く思います。このプレゼンテーションを聞いて皆さんもご理解いただけたと思いますが、民間レベルでの日仏交流がなければこの関西日仏学館はありえませんでした。クローデル大使と関西の有力者たちの出会いでこの関西日仏学館ができたのだと思います。そして、ヴィラ九条山もそうです。最初に建てられた関西日仏学館の土地に建てられたのがヴィラ九条山です。また、フランスにとって京都は現在、西日本で一番多くのフランス人が住んでいる都市になりました。

今年、関西日仏学館は設立九五周年を迎え、そしてヴィラ九条山、さらに、京都国際フランス学園も一五年前に設立されました。現在、毎日二〇〇人の生徒さんたちが通学しています。その子どもたちの六〇パーセント以上は日仏の家庭の子供たちで、それは日仏交流の一番素晴らしい結果じゃないかなと思います。そのうえ、フランス極東学院も京都にありますので、京都でのフランスのプレゼンスは今がたぶん歴史的にも一番強いと思っています。

そして、京都にある唯一の外国公館、それがフランス総領事館です。それも民間レベルでの交流と関係しています。フランス総領事館が京都にあるのは「フランスは文化の国、京都は本当に日本の文化の中心ですね」と皆さんにそう言われますけど、それだけではなくて、ビジネスや企業、よく見ますと、京都で生まれた会社は現在も本社が京都にあります。例えば世界的に有名な任天堂やオムロン、堀場製作所、京セラ、ローム株式会社、日本電産といった会社です。しかし、大阪の会社は本社がどんどん東京に移りました。

私は京都が企業にとって「ものづくり」をするにもすごく適しているところだとPRをしています。民間レベルでの交流がなければ関西日仏学館も存在していません。民間交流がなければ、実際フランスと日本の関係構築はとても遅くなっていたと思っています。関西日仏学館が設立されるきっかけはビジネスですね、つまり絹の商売です。先ほどの本の中にはポラックさんの絹の話が少しありましたが、実は一九世紀にはフランス（特にリヨン）は絹の生産が世界一の国でした。しかし、蚕がすべて病気になってしまい、元気な蚕がいるところを探していま

した。ちょうど古くから養蚕業が盛んであった日本にはその病気がなかったのです。その当時の日本の幕府と連絡をとって、フランスのナポレオン三世が開港を懇願しました。その時は「駄目です」、あるいは「鎖国なので輸出できない」などと断わられましたが、幕末に「日本の近代化を手伝ってくれれば、蚕を送ります」と受け入れられ、そのおかげで日本とフランスの交流が始まりました。国と国同士で交流が始まることももちろんありますが、もともとは民間のレベルの交流が非常に大切だったと思います。

これがきっかけで、その後は今お話いたしましたように関西日仏学館、そしてロマン・ロラン研究所も、フランスからの考え方や哲学、ヒューマニズムの発信なども大変大切なことだとご理解いただけたと思います。それはすべて民間ですね。そして、現在、関西日仏学館の名称が二〇一三年から変わりましたけど、活動は全く変わりませんので、私たちにとってはずっと日仏のままです。例えば、先月の二四日に終わりましたが、「フランコフォニーの月間」（フランス語圏のお祭り）を一ヶ月間開催し、二〇くらいのイベントを行いました。アフリカについての講演、アートの展覧会、ジェンダーに関する本などのイベントを数多く開催しました。昔はフランスといえば関西日仏学館だと皆さん考えておられたのですが、今は民間レベルでの交流は関西日仏学館だけでは足りないと思います。コロナ禍ではありますが、今後は規制も緩和され、旅行ももっと簡単になりますので、やはり関西日仏学館だけでは十分ではないので、外部の大学、企業、団体とパートナーシップを組んでいろいろやりたいと思っております。関西日仏学館の前にあります京都大学、最近は大垣書店とのイベントも企画しています。そして、昔のアリアンス・フランセーズ大阪がアンスティチュ・フランセと合併して、現在、大阪にも関西日仏学館がございます。大阪でもパートナーを見つけて、もう少し外部にも発信したいと思っています。本当に民間レベルの日仏交流が私たちの活動の中心になっております。とても大切だと思います。

二番目の話の中には、フランスから見た京都の話ですけど、先ほどの宮本さんのお話の中で、ポール・クロー

デルについて触れられた箇所、暮らしのイメージではそんなに変わっていないと思います。世界で一番きれいな街といえばとフランスで尋ねたら、京都が出てくると思います。また、京都は歴史的価値の高い街のイメージがあります。まず、日本はフランスで大変人気があります。特に若い人には漫画の文化の影響があると思います。漫画を読んで、日本の漫画というのは、もちろん歴史とか専門家の目から見るとちょっと不思議かもしれませんが、でも日本の伝統も少し入っていて、若い人はそこから入り、次に興味を示し勉強します。今は日本語を勉強している人も多いです。フランスで日本語は英語に次いで二番目に多く翻訳されている言語になりました。また、漫画とアニメのおかげで、現在、フランスは日本に次いで二番目に漫画を多く読んでいる国です。だから日本の文化にも興味があり、日本に来たら京都に来ます。

私は日本での滞在は長く、最初の九年くらいは東京に住んでいました。京都は二〇一九年にはじめて住むことになりました。もちろんそれまでに観光客として何回か来ました。一番に感じるのは、北山に住んでいることもあり、自然が多い町、鴨川のまわりは特に、そしてお寺や神社に行くと自然がたくさんあります。お家のなかにも狸が住んでいまして、こんなに大きな街には想像もつかないことだと思います。そして、子供がいる家族にとってはとても暮らしやすい町ですね。自転車があればどこにでも行けます。とても素晴らしいことだと思います。あとは、フランス人の目から、これは非常に大切なことですけれども、京都には古い建物がまだたくさん残っています。フランス人は一つ一つの建物だけではなくて全体的に見ます。フランス人は、写真でいえばワイドアングルですね。フランス人は風景の遠近の見通しを重要視します。ですから、一つのきれいな建物があっても周りと調和がとれていないといけません。フランス人は違和感のあるものにすぐ眼が行きます。

すべてが保存されている状態が美しいと思うのです。たとえば、先斗町や夷川、丸太町には古い町並みがまだたくさん残っていて、それはフランス人の目から見てとてもいいことだと思います。私は、京都の歴史、そして、歴史が作り出す街の魅力を保存しようと活動されている

京都の人々を応援しています。しかし、残念ながら多くの町屋が消えていっています。遺産は大変重要です。しかし、クリエーションも同様に文明を保護するために重要です。

私たちは関西日仏学館で、毎年、京都市と「ニュイ・ブランシュ」（日仏現代アート展）を開催致しております。現代アートはもちろん伝統とは違いますけど、たぶん五〇年後に伝統になると思います。今のクリエーションは五〇年後の財産になりますので、若手のアーティストや、いまの時代には新しすぎて少し変かなと思われるアートであっても応援しないといけないと思っています。未来への遺産がなかなかないので、少しずつ、古いものを大切にして、古いものから影響を受け新しいことをつくって、次の世代に遺産を渡すことになります。古いものを保存し、新しいものとのバランスが大切だと思います。それでは、皆様からの質問をお受けしたいと思います。私からの、フランス人からみた京都と民間交流については以上になります。

和田：イルマンさん、ありがとうございました。今後の交流の見方ですとか、京都に関する非常に示唆的なご意見をいただけたと思います。広い視野でフランスの方がみられているというのは、私も非常に腑に落ちる思いがいたします。本当にありがとうございました。また質疑の時間は最後にとりたいと思っておりますので、第二部の方はこれで終了とさせていただきます。二部で登壇いただきましたイルマンさん、宮本さん、ありがとうございました。

続きまして、最後第三部、「戦時の弾圧と戦後の新たな旅立ち」に移っていきたいと思います。加賀美先生と西成先生ご登壇いただけますでしょうか。第三部につきましては戦時の弾圧以降のお話になっております。今日は詩の朗読とトークということで、朗読を楽しみに来られた方も多いのではないかと思います。それでは加賀美幸子さん、よろしくお願いいたします。

加賀美：よろしくお願いいたします。

宮本エイ子さんのお話、ジュール・イルマンさんのお

話、そして和田さんの名司会で、本当に勉強させていただきました。これを元に、私はこれから、もっともっと勉強したい、と、そういう気持ちになりました。よろしくお願いいたします。

マイクですけれども、この声で大丈夫でしょうか。というのは、マイクとか音によって内容の印象がガラッと違うことってあるのです。このあと朗読ですし、私のいつもの声ではないかもしれませんが。お話ししたいと思います。

それでは、本日私が参加させていただきました繋がり、結びつき、について、少しお話をさせていただきたい、と思います。

『読み聞かせる戦争』という、この本ですが、この本の帯を書いてくださいましたのは永六輔さんですが、「戦争についての二七冊は平和についての二七冊。戦争を読み伝えよう、平和を語り伝えよう」と書いてくださいました。

平成二七年ということは、永六輔さんは二八年に亡くなられましたので、本当に旅立つ前の年にこの本は再販になったのです（二〇一五年、平成二七年再販）。

この本は平成二七年再販ですが、実は平成一四年（二〇〇二年）にすでに出ていました。ということはもう二〇年前になるのですね。二〇年前に永さんが書いてくださいました「戦争についての二七冊は、平和についての二七冊」、『ヒロシマの空』林幸子さん、『きけわだつみのこえ』より、瀬田万之助さん、火野葦平さんの『麦と兵隊』、『生ましめんかな』から栗原貞子さん、『敗戦日記』は高見順さん、『はだしのゲンはピカドンを忘れない』中沢啓治さんです。そして井伏鱒二さんの『黒い雨』、原民喜さんの『夏の花』、そして山之口貘さんの『沖縄よどこへ行く』、野坂昭如さんの『火垂るの墓』、阿川弘之さんの『暗い波濤』、石垣りんさんの『崖』、そして、この本の一番最後に、宮本正清さんの『戦争はおしまいになった』で纏めさせていただいたのです。

二〇年前にこの本でご紹介させていただきました。

日本ペンクラブ編、加賀美幸子選、『読み聞かせる戦争』です。私の前書きですが「戦争について多くの人々が遺した赤裸々な事実や昇華された文学、それらは必ず、世

紀を越えて、遠い将来に誰かが手にとって読むはずです。でも、そのためにも、私たちはそれらを大事にしていかなくてはなりません」と私は書いています。

これは朗読にも関わるのですが、重いまま伝えるのではなく、柔らかな心で読んでこそ伝わる、これが長い間、放送という仕事の道で多くの人々やさまざまなテーマを通して教えられたことなのです。重いことを重いままではなく、柔らかな心で読んでいく、そのことを、お伝えさせていただきました。

そして、この本を手にしてくださった宮本エイ子さまと、宮本エイ子さまとお親しい冷泉貴実子さまからご連絡いただきまして、今回、伺うことになりました。

先ほど、何度もお話がありましたが、二月の予定でしたけれど、今日この日になりました。実は二年前、二〇二〇年にエイ子さまはご連絡くださったのです。その後、折に触れて、メールの交換がエイ子さまとのあいだで続きました。それは五〇周年の具体的なことはもちろんでしたが、お互いの日々の交換のメールでした。私の放送番組へ、エイ子さまからご感想もいただきました。その中で、ロマン・ロラン研究所の想いがしっかり自然に伝わってきました。そして本日、メールだけではなくて、直接、お会いすることができることになりました。とても嬉しいです。

そしてもう一つ、結びつきについてお話しさせてください。稲畑勝太郎さんのお話がでましたが、この会場が稲畑ホールということをうかがって、本当に心が高鳴ったのです。私は今年二月二七日に亡くなられた稲畑汀子さんと大変深い結びつきがあるのです。

わたくしは稲畑汀子さんと番組を長い間ご一緒させていただきました。「列島縦断俳句スペシャル」、この番組は、最初から最後まで約二〇年、汀子さんとご一緒しました。長い、長い、お付き合いでした。この番組は、珍しいことに朝から夕方まで続いて、番組と視聴者が結びついて放送する、アナログの時代の意味のある生放送の番組でした。日本中から俳句作品が寄せられて、それを稲畑汀子さんや金子兜太さんと生放送で選んでいくという、大事な番組だったのです。

「伝統俳句協会」の代表の稲畑汀子さん、「現代俳句協

会」の金子兜太さん、このお二人が放送で初めて、話し合う、という、これはＮＨＫも初めての企画、その番組の司会が私だったのです。現代俳句と伝統俳句、そして視聴者との同時進行の生放送でした。

ですから、今日は本当に、様々な結びつきを感じ胸が高鳴りました。思いの繋がり、ヱイ子さんとの繋がり、朗読からの繋がり、稲畑汀子さんとの繋がり、という深い繋がり、結びつきによって、本日はお話をさせて下さいませ。……お話ししなくてはなりません。

ただ作品を読むのとは全然違うのです。もちろん、作品を作品として読むことも大事です。でも、その「繋がり」の中で読むと、本当に違ってくるのです。朗読の濃度が、違ってくるのです。

この繋がりをお話しながら、宮本正清さまの詩集の中からまず「はるさめ」と「途上」そして「かちあめ」を読ませていただきます。

（詩は宮本正清（一九八一）『焼き殺されたいとし子らへ』、みすず書房、東京、より引用）

はるさめ

しとしと　しとしと
やわらかに　しずかに
しかし音はたてて
かろやかにしのびあしに
ふる今宵のあめは
つかれたわが胸に　こころに
冬に凍てた黒土のうえに
しみ、ひたし、なで、だきしめる
ねむれぬわたしのこころの
闇のおもさを洗いとる
ものやわらかに母のように
ああうるおいのぬけた生活のわびしさに
荒れすさんだたましいはささやく
死ぬならばふるさとの土に

常緑樹のかげに……
突然！
闇夜をゆるがす爆音B二九
かたわらに眠る三児の小さい頭に
花模様の夜具をすっぽりとかけて
不気味な音の去来に耳をすます

途上

壁は叫ぶ、ラヂオは叫ぶ、
さしひかえよ、無用、不急の旅をと！
しかし見よ、この人の群れを、
駅に、停留所に、道路に、
群がり、臭い、はみ出し、右往左往するを、
どの顔にも、色つやはなく、
痩せしなびた印象、
落ちつきのない、いらいらした、
不安のただよう顔

一列がみだれて二列になり、三列になり、
道路を斜めに遮断している、
古家具を満載した牛車曳が通りかかり、
癇癪をおこし、口汚くののしりつつすぎれば、
誰も憤慨するでもなく、
かきわられた泥のように
無気力に開いて、無気力にまた閉じる、
それほどみな疲れているのか
どうでもいいのだ
心は他にあるのだ、
そうだ、
出て行ったきり消息のない、
倅に、夫に、父に！
そうだ、
今日の配給に
食膳の貧しさに！

かちあめ

かちいくさのお祝いに
ありがたや家々にひとふくろの菓子
めいめいに飴玉ひとつを頬張った子供ら
お母さんが小さいときには飴なんかいくらでもあっ
　たの？
おまんじゅうも？
おもちも？
おせんべも？
パンも？
ああ、幼い欲望のかぞえあげる数の少なさ
チョコレートなく、ケーキなく、シュークリームなく、
異国料理の名は知らず

お父さん
どうしてお菓子が以前にあったのに今はないの？
戦争だからでしょう？
戦争がすんだらまたお菓子ができるの？

いつ戦争がすむの？

宮本正清さまの詩を三つご紹介しました。わたくしは、生まれて翌年、太平洋戦争がはじまりました。ですから戦時中は二歳、三歳です。空襲警報、B29。昼間は防空壕に飛び込みました。夜は電気を消して息をひそめました。もちろん子どもたちは外で遊べません。お米も乏しい、食べ物も乏しい。でもみんな同じなんですよ、みんな「無い」ということで平等なんですよ。人をうらやむことはない。特別な人なんていないのですから。みんな、誰もが、「無い」ことで平等。そういう平等です。ですから、「うらやましいな」なんて思うことはない。子どもたちも、いろんな家庭の子がいましたけれども、みんな同じ、貧しくてつらいけれど「うらやましい」と思うことはない。そういう意味で平等でした。

でもね、今、お菓子のこと、読みましたでしょう？お菓子、昔は、お饅頭もあったの？　パンもあったの？チョコレートは？　とにかくそういうことです。お菓子はね、本当に、夢でした。わたくしもそうでした。だっ

てお砂糖も配給でしたから。お砂糖も配給。お菓子なんてあるはずもありません。私の母はザラメでカルメ焼きを作ってくれました。そして小さい私にお菓子の代わりに歌を歌ってくれたんですよ。二歳、三歳ですから、今でも覚えています。皆さんもご存じかもしれません。例えばですね、

ガッタンゴッコ　ガッタンコ
お菓子の汽車が　走ります
お釜はまあるい　唐饅頭
黒いレールは　アメンボウ

って母が歌ってくれるんですよ、飴んぼうの歌。その他いっぱい歌ってくれましたね。

山の中の谷あいに
きれいなお菓子の家がある
門の柱は飴んぼう
屋根の瓦はチョコレート

ですよ。夢のようなチョコレート、屋根の瓦ですよね、その他いっぱい歌ってくれましたね。そしてこの歌はたぶん、正清先生、宮本先生も歌ったと思います。

お菓子の好きなパリ娘
二人そろえばいそいそと
角の菓子屋で「ボンジュール！」
選る間も遅し　エクレール
腰も掛けずにむしゃむしゃと
食べて口拭くパリ娘
残るなかばは　手に持って
行くは並木か　公園か
空は五月の　みずあさぎ

とにかく小さい時ですからもうしっかりと覚えているわけです。西條八十が作詞。

たぶんこの中の皆様も、年を重ねた方は、この歌をご存じかと思います。若い人も、西條八十の歌ですからご存知だと思います。そして、ちょんちょんちょこちょこ

チョコレートの歌。

ちょんちょんちょこちょこチョコレート
ゆうべ見た夢チョコレート
甘くておいしいチョコレート

ちょっと横道になりますが、由紀さおりさんと安田祥子さん、ご姉妹ですが、番組のスタジオでお母様もご一緒にしました。そのとき、子どもの歌がテーマでしたが、お母様が私に「ちょんちょんちょこちょこチョコレート、加賀美さん、一緒に歌ってよ」とささやかれました。嬉しい言葉でしたが、何故か私は、そういう時、歌わないんです。普通は多くのアナウンサーは声をかけられれば「はい、歌います！」と、喜んで中に入る人が多いのですが、私はそうじゃないんです。何の場合でも、そうなんです。その時も遠慮しました。でもやっぱりあの時歌っていればよかったかなぁなんて、今思います。私は、いつもそういうタイプで仕事をしてきましたが、今思えば反省が多いです。あのとき歌ってたら違ってたかもしれないのですけれど……。ちょんちょんちょこちょこチョコレートの歌、由紀さおりさんと安田祥子さん、お母さんのことを思い出します。

それくらい、当時はとにかくお菓子がなかったのです。今は溢れているお菓子。「こんなにお菓子食べちゃだめよ！　甘いからだめよ、控えなさい！」という時代です。時代の流れはどうすることも私たちは出来ません。ですから時代を創る人にはきちんと考えてほしいですね。これはただの歌ではなくて、当時の子どもたちがどれほど飢えていたか。そのことが分かる時代の歌です。

ここでちょっとＰＲをさせてください。昨日ＮＨＫからメールが入りました。三宅美穂チーフディレクターからです。「加賀美さん、五月三一日にＢＳプレミアムで『戦争直後の日本』の再放送があります」と。私はその番組のリハーサルで、三宅ディレクターから「加賀美さん、終戦直後、どんなでしたか」と質問され、私は「お菓子もなかったからお菓子の歌を歌っていましたよ」とリハーサルで歌ったら「あっそれいただき！　これ使う」と。

「ちょんちょんちょこちょこチョコレート」、それが今度五月三一日にBSプレミアムで放送になります。終戦直後、周りがどんな様子だったか。4Kカラーで読み解く、蘇る、4Kカラーの映像ですから、しっかり蘇るのです。ということで、メールがNHKディレクターからありまして、いつも歌ったりしない私がいくつかのお菓子の歌を歌ってしまったということです。リハーサルのときに歌ってしまったことが、放送になってしまったという不思議なことでした。

そして終戦。私は五歳になりたてでした。ラジオの前で、終戦の日、天皇陛下の言葉、大人たちはラジオの前で正座し、耳をそばだて頭を垂れながら聞いていました。私は、そばで聞いていたのですが、振り向いて、わたくしの祖父は「幸子、戦争は終わったよ」と。

私はびっくりしました。嬉しくて嬉しくて飛び出しました。戦争中は、危ないから、外で遊んだなんてことはありませんでした。私は集団疎開の年齢ではないので、縁故疎開で、上州渋川の親戚の持ち家に疎開していたのですが、「戦争は終わった」と聞き、家を飛び出して、道にでて、「みんなぁ！　戦争がおわったよぉ、出ておいでぇ。道で遊べるよぉ！」って大声を上げたんですよ。みんな飛び出してきました。駆け出してきました。「みんな遊べるよ、これから道で遊べるよぉ」って。この時のことが、今でも焼き付いています。大きな声をあげて話すなんてことありませんでした。戦争中は、小さな言葉で、話さなくてはなりませんでした。内容だってね、とがめられましたよ。子ども心に言葉も控えました。

言葉、言葉の話。わたくしはこの『読み聞かせる戦争』ではなくて、宮本正清さまの詩集を一生懸命読みました。そのなかに先ほどの「かちあめ」、言葉の話の詩がとても好きでした。

「しかしのこっているものを」という詩。宮本先生の詩です。

（詩は宮本正清（一九八一）『焼き殺されたいとし子らへ』、みすず書房、東京、より引用）

ことばということばが
みんな、みんな犯されて

喪くしたよ
いじらしいはにかみを
楚々とした処女性を

なら
どうすればいいのか
しかし
この燃えたつものを
わきたつものを
じっくりと芽ばえるものを
そうっといずむものを

たまらない
これを
ああ！

空

澄みきった大空に
じっとそそがれた嬰児のひとみ

何もない碧さのなかに何をみるのか
誰にも通じない言葉でしきりに話している

この大空にあることか
人を殺すものが
憎しみにふくれた愛国心が
と思いつつ
じっと仰ぎ、みつめる、若い母も

焼き殺されたいとし子らへ

六十一日の牢獄
飢餓の一線で支えられた六十一日

やせおとろえた肉体と
あちこちのねじがぬけおち、ゆるんだ精神
八月十六日
とつぜん青空のもとに
日の光のなかに投りだされたわたしは
半生の肉体と精神に
ただ生きていたのだ
おそろしい自由を！
自由だ！　わたしの眸はさけぶ
道を、家を、緑を、空を、人を、埃りをみる
　自由を！
自由だ！　わたしの喉はさけぶ
のみたいだけ水をのむ自由！
小便をしたいときにする自由！
ああ、世界の最大の自由があるのだ
このおれには今！
八月の烈日にやけただれる道を
衰えきったわたしの肉体はたどりつつ
天地もつらぬくばかり
泣きさけび、どなり、おらび、わめき
よろこびたいこの自由だ！
だまって、ひょろひょろとあるきながら
妻とその老母にいたわられてかえる途に
おれは自由だ！
都大路をふきまくる塵あくたの竜巻きに
ふきまくられる自由だ
いつまでもこない電車を
いつまでも待っていられるおれは自由だ
じゃあじゃあ
水道を顔からあびながら
六十一日の油汗とともに万こくの涙を
ながしてもかまわない　おれは自由だ

戦争はおしまいになった

「お父たん、戦争はおしまいになったねぇ」

「ええ、戦争はおしまいになりましたよ、周
　坊！」
父に手をひかれて、たよりない足どりで
京都駅まえの広場をよこぎりながら
二歳と十ヶ月の周作がとつぜん云った
そうだ、周作よ、戦争はおしまいになったの
　だ、
お蔭でお前の小さい手をひいて今宵
この広場をよこぎることのできる父なのだ
六十日の牢屋の生活から放たれたのだ
意味も知らずにお前の口から出たこの言葉が
おまえにもわたしにもどんなにおそろしいこと
　か
わたしたちの家庭にとって！
正しいことをおもい
美しいものを愛したゆえに
お前のお父たんは牢屋につながれ
お前たち幼いものにもさびしいお留守の日が
　つづいたのだ
「戦争はおしまいになりましたよ、周坊！
　そしてこの広場にあかりがかがやいているの
　　です！」

本日は宮本正清さまの詩を大事に詠ませていただきました。

ありがとうございました。

和田：加賀美先生、ありがとうございます。朗読をお聞きしていたら、私も司会に戻らないといけないのになかなかそっちに戻っていけなくなるという、本当にありがとうございました。稲畑家とのつながりをお話しくださり、我々もそれを踏まえたうえで詩を聴くことができて、本当にありがとうございました。事前に詩のテキストを用意していたんですけれど、これは映さなくていいかなと思って、私も目を瞑って聞いていたんですけれども、特にお菓子の話ですね、胸を突かれて、子どもにこんなことを思わせるような社会にしてはだめだなと思いました。今、ウクライナの状況とかを見ていくなかで、宮本

正清さんの詩であるとか、『読み聞かせる戦争』であるとか、どちらも読み継いでいかないといけないと思いました。本当にありがとうございました。

最後に、本日のパネリストそれぞれに一言ずついただきたいと思います。イルマンさんと宮本さん、もう一度ご登壇いただけますか。それではジュール・イルマンさんから、今日のシンポジウムを聞かれて一言ご感想をいただければと思います。よろしくお願いいたします。

イルマン：ありがとうございます。やっぱり、まず、日仏の交流を始めた方々への素晴らしいオマージュだと思いますし、また最後の部分は近年の国際状況にも言えることだと思います。今苦しんでおられるウクライナの方々のことを想うと、とても胸を突かれる内容だったと思います。皆さんありがとうございました。

和田：ありがとうございます。続いて加賀美先生よろしくお願いいたします。

加賀美：勉強は大事で、さまざまな学びの形があるので、そのことを大事にしながら、と思っております。そして、今日は、沖縄の日本復帰五〇周年で、日にちが重なったそのことにも意味を感じますね。ですから本日は忘れられない日になりました。ありがとうございました。

和田：ありがとうございました。続いて宮本エイ子さんお願いいたします。

宮本：まずジュール・イルマンさん、堺事件をはじめ過去からの継承を引き継ぎ、また今日、この日仏学館の活動を活発に盛り上げてくださっていることに感謝申し上げます。加賀美幸子先生には、超過密なスケジュールのなか東京からいらしていただき、俳優でもない、アナウンサーでもない、加賀美幸子先生独自の世界観での〈詩の朗読〉、文字を追っていくより遥かに超えた強いものが心に深くしみてまいりました。初めての体験です。ここからお礼申し上げます。

おかげさまで文字通り記念の忘れがたい一日となりま

した。今日まで準備くださった方々、お手伝いくださった関係者の皆様、本当にありがとうございました。本日は本当にありがとうございました。

和田：西成先生よろしくお願いいたします。

西成：今日は本当に大変感動いたしました。物を読むというときに心動かされることもあるのですが、今日はそれぞれの方のお話をお聞きして大変勉強になりましたし、私にとっても忘れられない日になりました。加賀美先生、イルマン氏、そして宮本ヱイ子さんに感謝申し上げます。ありがとうございました。

和田：ありがとうございました。

1　幕末一八五八年（安政五年）の英語伝習所が一八六八年（慶応四年）長崎府管フランス語教場「広運館」となる。後出のレオン・デュリーはここでも教鞭をとっていた。

2　一八二二年生まれで医師、クリミア戦争の医官ののち、一八六二年（文久二年）、幕府は函館に病院建設計画を立て、駐日仏国公使レオン・ロッシュに助言をもとめフランスから募ったところ、レオン・デュリーが初来日したが、この計画は中止となって翌年仏国領事館が長崎に開館となり副領事として赴くことになる。一八六七年パリでの万国大博覧会の開催で徳川昭武らの案内役を務める。長崎領事館は閉館になったがデュリーはそのまま長崎に滞在。副領事時代、広運館でフランス語教師、一八七〇年（明治三年）に雇われる。そこでは井上毅、西園寺公望も学ぶ。

3　詩人、小説家（一八五〇－一九一七）。テオフィル・ゴーチエの娘。父の影響で東洋の風俗・文学に造詣が深く、日本、中国、ペルシアなどの詩文を翻案・翻訳した。その他小説「帝国の滝」、回想録「過ぎた日々の首飾り」など。

4　一八七二年（明治五年）に初めて西本願寺、知恩院、建仁寺で開催する。

5　一八七一年（明治四年）の西本願寺大広間で開催された博覧会は品数不足だったため明治五年を第一回とする。毎年一回、一九二八年（昭和三年）まで計五六回継続、京都の産業、観光、振興寄与。フランシス・リュエラン（一八九四－一九七四）。一九二

七年三月一四日、東京から京都へ着任。一九三一年離任、リオデジャネイロ、ニューヨークのフランス夏期講座発祥の地ショトカなどを経てフランスのレンヌ大学教授。著書 *Le KWANSAI.*

6 マルセル・ロベール。一八九五年一月一五日、パリ生まれ、一九七一年アントニーにて死亡。ソルボンヌ大学で英語大学教授資格取得。一九二〇年、カイロでのフランス語教授でスタートし、国家公務員としてキャリアを全うした。フランス、ブルホンで退任。

7 ジャン・ピエール・オーシュコルヌ（京都外国語大学名誉教授・フランス語）一一月六日、フランス、ニースの自宅で死去、八七歳。三一年前に在神戸・大阪フランス領事官副領事として来日。戦前から関西日仏学館、京都外国語大学などでフランス語を教え、七九年に帰国するまで半世紀にわたって日本に滞在、その大半を京都で過ごした。流暢な日本語を生かし、京都タワー建設の反対運動など、京都のさまざまな社会問題に積極的に発言した（朝日新聞　一九九五年一一月二一日木曜日の記事より）。

8 狩野直喜（一八六八－一九四七）中国文学者、一九世紀のヨーロッパの中国研究を紹介、熊本藩で神童の誉れ高かった。一九〇六年から一九二八年まで京都帝国大学教授、学士院会員、文化勲章受章。著書に『支那学文藪』『中国哲学史』。狩野直禎氏による講演「中国研究を通しての日仏交流京大シノロジーの創始者狩野直喜の場合」（『ユニテ』三五号、二〇〇七年）参照。

参考資料

宮本ヱイ子著『都ふらんす事始め』駿河台出版社　一九八六年発行

「流域」二二号「ポール・クローデルと関西日仏学館」

外交官文書　一九八七年　青山社

資料提供　木下ヒロミ、長谷川さと子

［水声社刊］

ジャン・クリストフ物語

原作　ロマン・ロラン

翻案　宮本正清　補訂　宮本ヱイ子

四六判　二〇八頁　一六五〇円（税込）

＊ご注文は最寄りの書店、または水声社（電話〇三－三八一八－六〇四〇）まで

二〇二二年度、読書会の報告

清原章夫

コロナ禍が三年目に突入した二〇二二年度は七月から九月の「第七波」、一〇月からの「第八波」と断続的に続いた。「第七波」は一日当たりの新規感染者数が国内で二〇万人を超える日もあった。「第八波」でも感染者数は徐々に増え、一二月二一日には再び国内で二〇万人を超えた。しかし政府は、五月二〇日にマスク着用について、屋外でほとんど会話をしない場合は「必要ない」とする見解を示した。また、感染拡大で停止していた海外からの観光客受け入れが一〇月には入国者数の上限を撤廃したほか、個人の外国人旅行客の入国も解禁。観光需要の喚起策「全国旅行支援」も始まった。

そんな状況下での二〇二二年度の読書会は、九回開催することができた。開催しなかった月は夏休みと講演会と重なった一一月だけなので、コロナの影響ではなかったことを強調しておきたい。ただ、参加者の人数は、コロナ前は毎回の平均が一〇名を超えていたが、昨年度は七名だった。また残念なことに、初めて参加者される方はなかった。

テキストは二〇一六年九月から読み始めた『ジャン・クリストフ』である。第七巻「家の中二」および第八巻「女友達」を毎回、約三〇頁のペースで読み進めた。

報告者が今回読む部分のあらすじ、報告者の感想および、特に読書会で議論したい項目を記載したA4サイズで数ページの資料を作成してこられる。

その資料にしたがって、報告者が解説をされる。その解説に添って朗読担当者がテキストの一部を朗読してくださる。朗読する部分は報告者が重要だと考える部分を選んで、あらかじめ朗読担当者に伝えておかれるのである。

忙しくてテキストを読まずに読書会に参加した場合でも、あらすじの説明と朗読が必ずあるおかげで、議論に参加できることが私たちの読書会の特徴である。

また、朗読を聞くことにより自分が目を使って読んだ際に読み落とした部分や、意味を取り違えた箇所に気づかせてもらえることがしばしばある。

約三〇分～四五分の報告者の解説と朗読が終わると報告内容に関する活発な議論が交わされる。そして、議論の合間にお茶とお菓子を味わいながら、『ジャン・クリストフ』に関する音楽を聴き、音楽の感想を述べあうのが毎回の読書会のスタイルである。

読書会で複数の方々の意見や感想を聞きながら、ゆっくりしたペースで読み進めることは、自分一人の読書では体験できない多くの魅力があるので、今年度も多くの皆様のご参加を願う次第である。

新役員一覧

令和四（二〇二二）年、任期満了につき改選され重任、新任を含む理事、評議員、監事は次の通りです。

理事長
西成　勝好

理　事
清原　章夫　シッシュ・ディディエ
四宮こころ　長谷川治清
宮本ヱイ子　能田由紀子
和田　義之　濱田　陽

監　事
福田　由美　村田まち子

評議員
奥村　一彦　久保　久子
松田有美子　中田　裕子
森内依理子　守田　省吾

短信

＊寄贈図書二点について　安木由美子さん　横浜市内で草径庵という読書喫茶を始めて十年が経ちました。昨年一一月には一〇周年記念としてエッセイ集『閑事　草径庵の日々』（ユニコ舎）を出版いたしました。ロマン・ロラン研究所の読書会をお手本に開始したささやかな営みは微かな層を重ね、読書サロンといった雰囲気に育ってきています。

数カ月前、拙著を書店で手にしてくださったという兵庫県の方からお手紙を頂戴いたしました。本の感想などが丁寧に綴られており、たいへん嬉しいものでした。見知らぬ方からのお便りを手にふと、ロマン・ロランが有名無名にかかわらず読者や識者たちと膨大な書簡のやり取りをしたことが思い出され、ロマン・ロラン全集の書簡集を書棚から取り出しました。

私たちはロランの時代から想像もつかぬほど交流に要する時間を短縮し、手段も多く持つようになりました。しかし相手に真摯に向き合い語り合うことの尊さは、いささかも変わっていないと思います。むしろ今こそ、そのことに注意深くなる必要があるかもしれません。相手の問いかけや思いに応じて綴られるロランの言葉は、時にやさしく時に厳しくもありました。そんなことに気づかせてくださった兵庫県の方とは、手紙とメールでの交流が続いています。

バシール・バシール＋アモス・ゴールドバーグ編『ホロコーストとナクバ――歴史とトラウマについての新たな話法』本書を訳して　小森謙一郎さん　ナクバという言葉をご存知ですか？　一九四八年のイスラエル建国以来、パレスチナの人々が被ってきた苦しみを指す言葉です。今年で七五年になります。ほとんど報道されませんが、追放、占領、略奪、殺害などが、現在も続いています。それどころか今日ますます悪化しており、ナクバを通じてホロコーストが続いているかのようです。ホロコーストの被害者だったユダヤ人のもとで、なぜ新たなアラブ人被害者が生み出され続けるのか。その構図を、歴史、政治、文学、思想などの観点から、多角的に示したのが本書です。ホロコーストとナクバのつながりを把握し、これまでの出来事の意味を変えることができたとき、はじめて平和が訪れることでしょう。

＊ウクライナ募金　五月一五日、財団設立五〇周年記念「古都・京の記憶に残すべき戦時の日仏交流　関西日仏学館」の会場にてウクライナ募金に四五〇〇〇円集まる。ロマン・ロラン研究所から五五〇〇〇円を加え計一〇万円、京都市

国際交流課を通して京都に避難しているウクライナ人へ贈る。

＊金剛育子さん　祝　京都市、府の長年の教育功労者として旭日双光章

＊金剛永謹さん　祝　日本芸術院賞、恩賜賞を受賞

＊和田義之さん　ＮＨＫのＥＴＶ特集「誰のための司法か〜團藤重光 最高裁・事件ノート〜」

大阪空港訴訟の最高裁判決を巡る顛末が取り上げられていた。団藤重光判事のメモから、裁判体に対する司法介入が明らかになった。当時最高裁の調査官であったロマン・ロラン研究所で講演くださった園部逸夫先生もインタビューを受けておられたが、お元気そうな様子であった。

＊植松晃一さん　ロマン・ロランの蔵書票を入手しました。チェコの画家Emma Löwenstamm の作品で、亜鉛版を使ったジンコグラフィという技法で刷られたもののようです。欄外にEmma の自筆署名があります。

ロランの蔵書票には、Gabriel Belot によるものなど何種類かあるようですが、この蔵書票のデザインは最も美しいものの一つだと思います。ジャン・クリストフを想起させる図柄です。片山敏彦生誕百年記念の展示会（高知県立文学館）のカタログに掲載されているのを見て以来、七〜八年探してようやく入手できました。

ロランの令妹マドレーヌが描いたとされるイラストも入手しました。詳細不明ながら愛猫が描かれていて良い感じです。ロランの自筆のみならず、こうした周辺の遺物もすくい上げていければと思っています。

＊松田有美子さん　待望の『ジャン・クリストフ物語』書店に並ぶ（原作ロマン・ロラン　翻案宮本正清　補訂宮本エイ子）が、水声社から出版されました。

私は住まいの亀岡で「児童文学を読む会」という小さなサークルに所属しており、毎月一回読書会をしています。

そこで、この本が出版され早速、今年度最初のテキストにこの『ジャン・クリストフ物語』をと提案し、この四月から皆で読み始めました。

メンバーは児童文学好きの六〇歳代から七〇歳代の一〇人程度の小さな集まりです。

第一回目の集まりでは、ほとんどの人が「ロマン・ロラン」という名前を知っており、また「ジャン・クリストフ」も「ああ、懐かしい。昔若い頃読んで感動した」「また、このような形で出会えて嬉しい」などの声も上がり、また、長年教師をしていた方からは、高校の教科書に「ゴットフリート」の部分が載っており、それを読んだことが将来国語の教師になろうと決意した一つのきっかけであった、という話も出て、大いに盛り上がり、また、このサークルで

「ジャン・クリストフ」を読むということを聞いて、是非仲間に入れてほしいと、初めて参加された方もおられ、皆で大歓迎。

また、ロランの名前も本の題名も知らなかったというメンバーも、皆に追いつけるよう頑張って読んでいきたいと意気込みを語り、読書会はいつもの通り和気あいあいと皆、好き勝手を語り楽しい時間が過ぎました。

言うまでもなく、この本は翻案、抄訳ではありますが、宮本正清先生の原作の精神と面白さを十分に伝えてくれる格調高い文章にメンバー全員が魅せられ、少年クリストフが様々な苦難に屈せず、一人の人間として成長し生き抜こうとする物語に、あるメンバーは長年の自分の人生を重ね涙する場面などもあり、メンバー全員がそれぞれの感性で少年クリストフの物語を温かく受け止め深く共感しあえた良い読書会になりました。

物語はまだ続きます。

今はまた来月皆で一緒にさらに読み進めることを全員が楽しみにしているところです。

私は、改めてこの本の魅力に惹きつけられています。

私たちの世代にも、またもちろん子どもたちや若い人たちにも、是非手に取って読んで欲しい。

地元の図書館に置いてもらえるよう届けたり、小学校の「図書委員」や「子どもたちへの読み聞かせ」などのボランティア活動を通して微力であってもそういう活動を地道に楽しみながら続けていきたいなと改めていま、この本を手元に置きながら思っています。

＊京都の人に親しまれてきたフランスのシンボルの呼称が七～八年前から「アンスティチュ・フランセ　関西」と変更されてまいりましたが、二〇二三年四月一日より　関西日仏学館という名称が戻ってきました。文化参事官ブロソーさんと総領事で館長のイルマンさんのご尽力で（ブロソーさんはイルマンさんの前々任者）、京都市民にはうれしいニュースです。

寄贈図書

フランス　ロマン・ロラン協会

＋　冊子　カイエ　四九、五〇　二〇二三

アンスティチュ・フランセ　ジャポン

＋「ヴィラ九条山　七二候」（ガリマール）

• 安木由美子さん　『閑事　草径庵の日々』（ユニコ舎）二〇二三

• 小森謙一郎さん　『ホロコーストとナクバ』（水声社）二〇二三

財団法人ロマン・ロラン研究所設立趣意書

設立者・初代理事長　宮本　正清

ロマン・ロラン（一八六六～一九四四）は、日本人にもっとも強く深い、精神的、道徳的影響を与えたヨーロッパの芸術家の一人であります。武者小路実篤、志賀直哉等の白樺派の人々をはじめ、高村光太郎、尾崎喜八、大仏次郎、小島政二郎その他の作家、音楽家、画家、彫刻家、さらに科学者、実業各方面にいたるまで、その青春時代をロマン・ロランの思想、芸術の光に照らされ、人格的感化陶冶を受けた者は枚挙にいとまないのであります。

しかし、ロマン・ロランの真の偉大さと、存在価値は、たんに文学的分野にとどまるのではなく、むしろその博大な人間愛にあります。人種、文化、文明等のあらゆる国境を越えて、真に世界的、人類的である彼の愛の精神は、「ジャン・クリストフ」「魅せられたる魂」その他の小説、戯曲、伝記、文学的、音楽的、歴史的研究のみならず、現代社会のあらゆる不正と戦うために、人権と自由を擁護するために、多くの政治的、社会的論争を生涯つづけました。さらに、ロランは、東洋と西洋、ヨーロッパとアジアとの相互理解、信頼、尊敬と両者の協力が、人類の進歩と平和のために、いかに必要であるかを説き、われわれの文明を堕落と頽廃から救いうる唯一の道は、アジアとヨーロッパが、あたかも車の両輪のように支持し合い、各人種、各国民がユニークな文明、固有の伝統を尊重、保存して、人類全体の偉大な共有財産として、現存のそれに勝る大文明を創造すべきだと言っております。ロランは、インドの哲学、宗教を研究した数巻にわたる著述の中で東洋の精神のもっとも深遠で高邁なものは、西洋のそれと本質的に異なるものでないばかりか、両者がほとんど完全に一致していることを実証しております。

このような思想家、芸術家、偉大な人間が、わが日本において、半世紀以上にわたって、変ることなく、今もなお、青年層に親しまれ、愛読され、尊敬されていることは、日本のために、喜ぶべきことと信ずるのであります。

一九七〇年十二月

◆現在の主な三つの活動

ロマン・ロランセミナー　●講演会
公開講座　●読書会・研究会
●機関誌『ユニテ』発行

◆ロマン・ロラン研究所賛助会員について

●ロマン・ロランの著作に感動、また
●彼の周辺の芸術家たちに興味、
●あるいは、ロマン・ロラン研究所活動に共感

いずれの理由でも結構です。皆様のご賛同をお待ちいたしております。

●**特典**＝①機関誌『ユニテ』の配布。②賛助会員の参考に資する情報、資料等の提供。③公開講座無料。

●**会員**＝一般賛助会員は年会費一口五千円から。特別賛助会員は年会費十口以上。

ロマン・ロラン研究所の活動

一九七一
5・15　ロマン・ロランと日本の青年（映画『ロマン・ロラン』上映）　宮本　正清
11・27　苦悩のなかのインド　森本　達雄

一九七二
6・24　ロマン・ロランとフランス革命　波多野茂彌

一九七三
5・26　ロマネスク美術　ブルゴーニュ地方の教会を中心にして　高井　博子
12・18　私の人間観　末川　博

一九七四
6・29　私の通った芝居の道　毛利　菊枝
12・5　ロマン・ロラン没後三十周年記念――講演と音楽の夕べ　佐々木斐夫　演奏：玉城　嘉子

一九七六
7・11　ロマン・ロランとゲーテ　南大路振一
ユダヤ民族と西洋文明　岡本　清一

一九七七
2・10　中国文学とロマン・ロラン　相浦　杲

一九八九
4・20　ロマン・ロランの反戦思想と現代　加藤　周一
6・9　ロマン・ロラン全集と私　小尾　俊人
9・29　ロマン・ロランの革命劇から――フランス革命二〇〇周年の記念に　中川　久定
11・17　ロマン・ロランとの出会いから　尾埜　善司・今江　祥智

一九九〇
1・27　ロマン・ロランに負うもの――平和と音楽　新村　猛
6・2　ロマン・ロランとガンディー　森本　達雄
9・26　『魅せられたる魂』と私　樋口　茂子
10・26　占領時代における日本社会とロマン・ロラン　小尾　俊人

一九九一
11・30　ロラン・片山・ヘッセ　宇佐見英治
3・1　ロマン・ロランと私　松居　直

4・19　（財）ロマン・ロラン研究所設立二十周年記念
レクチャー・リサイタル　杉田　谷道
〝ベートーヴェン後期ピアノ・ソナタの夕べ〟

6・4　ロマン・ロランとベートーヴェン　青木やよひ

9・27　ロマン・ロランとデュアメル　村上　光彦

10・25　ロマン・ロランの思想の二面性　兵藤正之助

11・29　初めにロマン・ロランあり　岡田　節人

一九九二

6・26　〈大洋感情〉と宗教の発端　岩田　慶治

9・25　ロマン・ロランとイタリア　戸口　幸策

10・30　ロマン・ロランの革命劇をめぐって　鶴見　俊輔

11・27　宮本正清　没後十年記念追悼会
ピアノ演奏：山田　忍
静かにやさしき顔　佐々木斐夫
不思議な静けさ――宮本正清の世界　小尾　俊人

一九九三

1・29　自伝的諸作品について　佐々木斐夫

1・29　ロマン・ロランの演劇的世界　石田　和男

5・24　ガンディーとロマン・ロラン　山折　哲雄

6・23　『魅せられたる魂』を語る（前）　重本恵津子

10・15　『魅せられたる魂』を語る（後）　重本恵津子

一九九四

1・28　いま、ロマン・ロランを語る
尾埜　善司・今江　祥智

9・9　ロマン・ロランと音楽　中野　雄

10・14　神秘と政治　ロマン・ロラン、その思索と行動の
あいだ　B・デュシャトレ
ロランとフランス革命　河野　健二
自然科学とゲーテ　岡田　節人

12・3　ロマン・ロランとドイツ音楽　岡田　暁生
ベートーヴェン、デュカ他作品
ピアノ演奏：小坂　圭太

12・24　おはなし「ピエールとリュス」と「また逢う日まで」　今江　祥智
映画上映「また逢う日まで」（監督　今井　正）

一九九五

1・27　ロマン・ロランと日本人たち　小尾　俊人

6・2　私の歩んだフランス文学の道　片岡　美智

11・10　ロマン・ロランとR・シュトラウスの周辺　岡田　暁生

一九九六
6・14　ロマン・ロランとの出会いから　鄭　承姫
11・16　レクチャーコンサート　岡田　暁生
ベートーヴェン：ピアノソナタ　第21番、28番
ピアノ演奏：北住　淳
11・18　「戦間期のリベラル」経済学から見たロマン・ロラン　本山　美彦
一九九七
1・17　「主体的精神と普遍的人間愛」ロマン・ロランと魯迅　區　建英
6・6　わが青春と一生　岩淵龍太郎
9・19　ロマン・ロランと結核の時代　福田　眞人
10・4　ピアノとチェロのための夕べ
ピアノ演奏：北住　淳
ロマン・ロラン記念コンサート
チェロ演奏：小川剛一郎
一九九八
6・8　ロマン・ロランと種蒔く人　柏倉　康夫
9・25　ロマン・ロランと政治的魔術からの解放　柳父　圀近
10・30　ロマン・ロラン記念コンサート
ピアノ演奏：小坂　圭太
レクチャー：岡田　暁生
11・25　ロマン・ロランと大佛次郎　村上　光彦
一九九九
6・11　ロランと音楽　岡田　暁生
10・8　「日本ロマン・ロランの友の会」五十周年記念〝園田高弘ベートーヴェンを弾く〟　園田　高弘
お話とピアノ演奏
12・1　ロマン・ロランとインドの精神　森本　達雄
二〇〇〇
10・13　ロマン・ロラン没後五十五年と日本　佐々木斐夫
二〇〇一
2・23　ロマン・ロランと〈老いの豊かさ〉　青木やよひ
シンポジウム　今江　祥智
尾埜　善司
6・23　（財）ロマン・ロラン研究所設立三十周年記念コンサート　神谷　郁代
〝神谷　郁代　ベートーヴェンを弾く〟

12・21　ロマン・ロランとヴィクトル・ユゴー
ディディエ・シッシュ

二〇〇二

4・20　ロマン・ロラン記念スプリングコンサート
ヴァイオリン演奏：ピエール・イワノヴィッチ
ピアノ伴奏：郁子・イワノヴィッチ

11・11　ロマン・ロランの後継者たち　蜷川　譲

二〇〇三

4・19　ロマン・ロラン記念スプリングコンサート
ヴァイオリン演奏：ピエール・イワノヴィッチ
ピアノ伴奏：郁子・イワノヴィッチ

5・10　ロマン・ロランの作品による音楽とレコード
尾埜　善司
ピアノ演奏：沖本ひとみ

5・31　戦争と平和、科学を考える
ブリーモ・レーヴィを語る
ジル・ド・ジェンヌ
解説　西成　勝好

11・22　ロマン・ロランを読みながら　今の世界を考える
峯村　泰光

二〇〇四

5・29　〝きょう〟を読む『京都、半鐘山の鐘よ　鳴れ！』
朗読とおはなしの会
おはなし　尾埜　善司　朗読　村田まち子

7・16　ロマン・ロラン記念サマーコンサート
ヴァイオリン演奏：ピエール・イワノヴィッチ
ピアノ伴奏：郁子・イワノヴィッチ

9・11　抗日中国における中仏文化交流
中国の知識人はロマン・ロランをどのように評価したか
内田　知行

二〇〇五

1・29　現代の法とヒューマニズム
加古祐二郎と瀧川事件　園部　逸夫

6・12　ロマン・ロラン没後六十年記念コンサート
梅原ひまり　神谷郁代デュオ
ヴァイオリン演奏：梅原ひまり
ピアノ演奏：神谷　郁代

6・25　生々発展する魂
ゲーテとベートーヴェンそしてロマン・ロラン
青木やよひ

10・29　交差する肖像
ロマン・ロランとクローデル
J・F・アンス
通訳　原口　研治

二〇〇六
11・24　戦間期ヨーロッパとロマン・ロラン
山口　俊章

二〇〇七
1・20　日本におけるロマン・ロラン受容史
ディディエ・シッシュ
通訳　シッシュ　由紀子
琴　笙　ヴァイオリンによる新春コンサート
大谷　祥子

9・16　前理事長尾埜先生への感謝の会・記念講演
ロマン・ロランと日本人たち　尾埜　善司

10・4　ロマン・ロラン国際平和シンポジウム
宮本正清の詩『焼き殺されたいとし子らへ』
「わらい」朗読　尾埜　善司
フランソワ・ラベット
ロマン・ロランが愛したベートーヴェン
ピアノ演奏：神谷　郁代

10・13　村田まち子・宮本エイ子
中国研究を通しての日仏交流
京大シノロジーの創始者狩野直喜の場合
狩野　直禎

11・6　『ピエールとリュース』を演出して
今藤政太郎

二〇〇八
3・8　朗読の会
親子で読む・聴く『ジャン・クリストフ物語』
会員たち

6・28　中国におけるロマン・ロランの紹介者・傅雷
榎本　泰子

豊　剛秋・増永雄記
歌：下郡　由

2・3　歌と朗読の会
「ピエールとリュース」朗読
尾埜　善司　ほか　会員

7・21　朗読の会
第一次世界大戦とロマン・ロラン
そして『母への手紙』

二〇〇九

2・7　朗読の会とピアノ演奏『ジャン・クリストフ物語』
ピアノ演奏：岩坂富美子
朗読：下郡　由ほか

6・13　「日本ロマン・ロランの友の会」六十周年記念
レクチャー・ギターコンサート　西垣　正信
フー・ツォン　ピアノリサイタル

9・30　犠牲の宗教への問い　高橋　哲哉

10・24

二〇一〇

7・24　小林多喜二とロマン・ロラン――反戦・国際主義の文学を求めて　エヴリン・オドリ

9・29―10・3　一九五三年のフランスの子供の絵特別出品（京都市幼児・児童・生徒作品展及び姉妹都市交歓作品展）

10・9　ピアノリサイタル　神谷　郁代

二〇一一

2・19　朗読の会　トルストイ没後一〇〇年記念『トルストイの生涯』『伯爵様』　会員たち

二〇一一

11・19　フロイトとロラン――災厄の後に、幻想の前で
小森謙一郎

二〇一二

1・27　『ロマン・ロラン伝』翻訳・出版記念会
小尾俊人氏へのオマージュを込めて――京都会場
講演「ジャン・クリストフ」を読みかえして　村上　光彦
ロマン・ロランとみすず書房と小尾俊人さん
守田　省吾
スピーチ　フィリップ・ジャンヴィエ・カミヤマ

3・5　朗読の会
女たちの祭典・ワークショップ『魅せられたる魂』
アンネットとシルヴィ　会員たち

3・29　『ロマン・ロラン伝』翻訳・出版記念会
小尾俊人氏へのオマージュを込めて――東京会場
琴とヴァイオリン合奏
琴：大谷　祥子　ヴァイオリン：白須　今
『春の海』　宮城道雄　作曲
『夢のあと』　フォーレ　作曲

7・28　朗読の会『魅せられたる魂』
アンネットとシルヴィ
於　ロマン・ロラン研究所
10・20　ロマン・ロランと賀川豊彦　濱田　陽

二〇一三
6・22　ヴィヴェーカーナンダ生誕一五〇周年記念
スワーミー・ヴィヴェーカーナンダの生涯とメッセージ
スワーミー・サティヤローカーナンダ
7・6　〈朗読とピアノ〉オマージュ宮本正清
〈朗読〉『戦時の日記』『ジャン・クリストフ物語』
詩集『焼き殺されたいとし子らへ』
朗読　会員たち
〈ピアノ〉
作曲　ポール・デュパン
曲目　『ジャン・クリストフ』
岡田　真季
11・16　世界遺産ヴェズレー　ロマネスク芸術の宝庫
アンドレ・アンジェイ・グルシェフスキ

二〇一四
9・26　シター演奏と朗読
シター演奏　中川　啓子
朗読　『ビエールとリュース』など　会員たち
11・1　第一次世界大戦一〇〇年とロマン・ロラン没後七〇年記念　I・F〈読書の秋〉共催
第一次世界大戦下の知識人――アランとロマン・ロラン
久保　昭博

二〇一五
9・19　戦後七〇年と憲法九条の意義　曽我部真裕
11・28　ロマン・ロラン～聞き手として、証人として『ヴェズレー日記（一九三八―一九四四）』をめぐる考察
ディディエ・シッシュ
通訳　シッシュ　由紀子

二〇一六

ロマン・ロラン生誕一五〇年＆財団法人設立四五年記念事業

10・8　朗読会　読んで聴かせる『ジャン・クリ物語』
――ピアノ演奏付き――

朗読　村田まち子ほか会員

10・29　講演会　ガンディー&ロランの存在から今の世界を読み解く
ピアノ　岩坂富美子

宗教学者、山折哲雄先生に聞く
山折　哲雄
聞き手　濱田　陽

二〇一七

1・28　コンサート　箏とギター、ヴァイオリンとチェンバロで聴くベートーヴェン
大谷　祥子、西垣　正信
大谷　玲子、塩地加奈子
会場　金剛能楽堂

9・30　レセプション　京都ガーデンパレスホテル
戦争と文学　桑原武夫「第二芸術論」から見た戦後日本
大浦　康介

12・9　ロマン・ロラン、二〇世紀におけるユゴー的作家
ディディエ・シッシュ

二〇一八

6・9　日本国憲法の立憲平和主義と自民党改憲草案の問題点
山内　敏弘

10・20　ポール・クローデル生誕一五〇年記念「ユニテと共同出生」
中條　忍

二〇一九

日本ロマン・ロランの友の会七〇年記念

10・8　イリーナ・メジューエワ　ピアノリサイタル
ベートーヴェンを弾く
イリーナ・メジューエワ
イリーナ・メジューエワと西成理事長の対談付き
会場　京都コンサートホール

11・30　時代の流れにあらがって――大河小説の可能性
野崎　歓

二〇二〇

10・25　『ジャン・クリストフ物語』朗読とヴァイオリン演奏
朗読　村田まち子
ヴァイオリン　都呂須七歩
ピアノ伴奏　桒原日菜子

二〇二一

財団法人ロマン・ロラン研究所設立五〇年記念

1・21　朗読と音楽のマチネ

『ジャン・クリストフ物語』を読む
朗読　村田まち子
ベートーヴェンのクラヴサン曲を弾く
三橋桜子&パブロ・エスカンデ
会場　金剛能楽堂

5・15　アンスティチュ・フランセ　関西
財団法人ロマン・ロラン研究所設立五〇周年記念
古都・京の記憶に残すべき戦時の日仏交流――関西日仏学館
〈トークと詩の朗読〉
ジュール・イルマン、加賀美幸子
西成　勝好、宮本エイ子
司会　和田　義之

11・13　アンスティチュ・フランセ　関西
『生なるコモンズ』とロマン・ロラン
濱田　陽

『ユニテ』編集を終えて

『ユニテ』五〇号をお手元にお届けします。

二〇二〇年以来のコロナウイルスの影響で、講演会などの開催がままならず、それにしたがって本誌も四八号（「ベートーヴェンとロラン」特集）・四九号（「パンデミックに生きる」特集）と、イレギュラーな、でもそれはそれで意味深い誌面づくりになりましたが、今回から「通常号」のかたちに戻りました。そして、ロマン・ロラン研究所設立五〇年と並行して、『ユニテ』も五〇号を迎えました。

現在の『ユニテ』の第一号刊行は一九七三年一一月。巻頭には「祖国と人類　ロマン・ロランの手紙より」、また蛯原徳夫「ヴェズレーのロランの家」などが掲載されています。しかし、『ユニテ』の歴史はそれよりもずっと古く、「日本・ロマン・ロランの友の会編」として、一九五〇年一一月に『ユニテ』第一号（巻頭にロマン・ロラン「螺旋形に登り行く道」、第一期一五号・一九五〇－五八）、また一九六四年一月に復刊第一号（巻頭に宮本正清「再刊にあたって」、第二期四号・一九六四－六六）の前身があり、そこから考えると、今回の『ユニテ』は六九号目、ということになります。

時代の移り行きとともに、ロランに対する評価も読まれ方も、そのつど変容していきました。今号掲載の濱田陽さんの論考は、「生なるコモンズ」という観点から、過去・現在・未来のロラン受容の可能性を描いています。著者の死後に残されたテクストをどのように生かすことができるのか、それはつねに私たち自身の問題です。本というテクストだけでなく、たとえば京都という街をどう生かしていくのか、も似たようなことかもしれません。

皆さまのご自愛をお祈りします。

（守田省吾）

編集部

守田　省吾　　宮本ヱイ子
清原　章夫　　村田まち子
四宮こころ
シッシュ・ディディエ

ユニテ　第五十号

発行日　二〇二三年六月十日

発行者　一般財団法人
ロマン・ロラン研究所
理事長　西成勝好

京都市左京区銀閣寺前町三二
電話・FAX
（〇七五）七七一－三二八一
郵便番号　六〇六－八四〇七
郵便振替振込口座番号
〇一〇五〇－九－五九九九六

印刷所　（株）北斗プリント社

URL　http://www2u.biglobe.ne.jp/~rolland/
E-mail　rolland-miyamoto@mtf.biglobe.ne.jp
institut.romain.rolland@gmail.com
miyamoto.rolland@outlook.jp

No 50 Juin 2023

U N I T É

Sommaire

Les biens communs vivants et Romain Rolland — Yo HAMADA

Commémoration du 50e anniversaire de la fondation de l'Institut Romain Rolland :
Ville historique: les échanges Japon-France en temps de guerre dans la mémoire
de Kyoto – Institut français du Kansai
Jules IRRMANN, Sachiko KAGAMI, Eiko MIYAMOTO
Modérateur: Yoshiyuki WADA

Rapport sur le monde de la lecture en 2022 — Akio KIYOHARA

Compterendu des activités de l'Institut Romain Rolland

Activités et objectifs de l'Institut Romain Rolland

Postface

Publication: Institut Romain Rolland
32 Ginkakuji maé, Sakyo-ku, Kyoto 〒606-8407